



TITLE:

〈奇人〉 佐田介石の近代

AUTHOR(S):

谷川, 穰

CITATION:

谷川, 穰. 〈奇人〉 佐田介石の近代. 人文學報 2002, 87: 57-102

ISSUE DATE:

2002-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48604>

RIGHT:

〈奇人〉佐田介石の近代

谷 川 穰

はじめに

第一章 足跡と仏教天文学研究

第二章 ランプ亡国論への道

第三章 舶来品排斥論の〈共有〉

第四章 演説と結社

おわりに

は じ め に

1877 (明治 10) 年 3 月 1 日、有力新聞のひとつ『東京日日新聞』(発行は日報社)は「プライスエッセイ点 取 文」, すなわちある題目について賞金を懸けて論説文を募る, と発表した。これは、政府顧問を歴任した宣教師 G・F・フルベッキらがその企画を日報社にもちこみ、同社社長福地源一郎が評者のひとりとなって実現した。その題目は「日本の外国に交通することに於て幾何の弊害ありや……利益ありや」というものであった。残念ながら応募総数や応募者の階層、内容の傾向などは不明であるが、『東京日日』の紙面から、以下のことがわかっている。日報社が 8 月 10 日に一等 (賞金 25 円) 該当者なし、二等 (同 15 円)・三等 (10 円)・四等 (5 円) に一名ずつ入選という結果を紙上発表したこと。その日から三名の入選文を連日掲載したこと¹⁾。そして、二・四等入選者の賞金は当社が預かっているので取りに来られたしと呼びかけたこと²⁾、であった。このうち四等はのちの「憲政の神様」、尾崎行雄であった。その尾崎を抑え二等に入選した人物、筆名「白河斎」こそ、本稿でとりあげる佐田介石その人である【図 1】。

佐田は文政元 (1818) 年に肥後に生まれた浄土真宗本願寺派の僧侶で、1882 年の末に出張先の上越高田で亡くなるまで、仏教天文学の研究と〈独自〉の経済論を発信し続けた人物である。1906 (明治 39) 年の『文芸倶楽部』第 12 巻第 6 号 (定期増刊号) には、「明治畸人伝」という特集が組まれているが、そこで佐田は、「外国品の輸入を拒絶せんと企図」し、仏教天文学の「世界平面説」「須弥山論」「天動説」も主張して、熱心に諸方に遊説した「一種の奇物であった」³⁾ と紹介されている。また、著述家内田魯庵が 1920 (大正 8) 年に新聞紙上に発表した文



【図1】 佐田介石の肖像（仁藤巨寛『等象斎介石上人略伝』耕文社，1883より）

章には、

佐田介石と云つても今では余り知るものは有るまい。殆んど半ば忘れられてをる。が、介石のランプ亡国論と云つたら一時は全国に鳴つたもんだ。此のランプ亡国論といふ奇抜な題目だけを知るものは、或は皮肉な嘲世論と思ひ、或は固陋頑冥度すべからざる慷慨論と想像するだらうが、介石のは真剣に自家独特の経済的見地からランプを筆頭としての外国品の輸入が日本を滅亡せしめると信じた経済説なんだ⁴⁾。

とある。冒頭にあげた懸賞入選作も、実はこうした舶来品排斥論を展開したものであった。佐田はランプをはじめとする舶来品の排斥を、演説という手段を用いて人々に訴えた。しかも、「文明開化」の時代であるとされる明治10年代前半の社会において、一世を風靡する存在となったというのである。

その知名度の高さは、新聞記事からもうかがえる。たとえば、1882（明治15）年1月13日付『東京日日新聞』には「佐田介石師 同師ハ昨今大阪ニありて例の輸入品防遏説を唱へらるゝニ既ニ其説ニ随喜したる者七万余人の多キニ及べりと云ふ」という記事がみえる。1881年の春から夏にかけて、佐田は大阪および京都で舶来品排斥を演説して回った。その結果、大阪

で佐田の支持者は増加の一途をたどり、じつに七万人以上を数えた、というのである⁵⁾。ここで注目すべきは、「例の」という表現である。もちろん、佐田の〈独自〉性という含意がまず看取できよう。だがより重要なのは、『東京日日』という全国紙において、佐田の持論が「例の」と冠せられていることである。全国的（もちろん地域差はあろうが）に「佐田＝舶来品排斥論」という連想が定着していることを、「例の」の二文字は端的に物語っているのである。内田魯庵の「全国に鳴ったもんだ」という回想は、おそらく正しい。

このような人物を、先学も放っておくはずはない。とくに、1930年前後から1940年ごろにかけての時期⁶⁾と、1970年代末以降の時期に、佐田研究は集中的にあらわれている。前者では、まず社会学者でもあった真宗僧、浅野研真があげられる⁷⁾。浅野は「佐田イズムのルネッサンスは、現下の非常時に於てこそ、一層、再検討・再吟味をなさるべき必要性がある」という観点から、佐田を「民衆的愛国者」として賞賛し、その生涯と活動を紹介している⁸⁾。また、経済思想史の領野で経済論や結社活動について考察したのが、本庄栄治郎である。本庄は佐田の主な著作の分析から、佐田の思想をきわめて保守的としながらも、「単なる反動思想または旧思想として葬り去ることはできない」、一種の保護主義的経済論を唱えた人物であると規定した⁹⁾。この両名の研究は、佐田の顕彰ないし「再評価」という視角が大前提となっている点で問題ををはらむが、佐田に関する諸史料（著作、新聞記事、伝記など）を広く集積しており、今日でも重要な位置を占めている。

そして1970年代以降には、衣笠安喜、大濱徹也、柏原祐泉、牧原憲夫、奥武則らによって、その言説や行動の再解釈がなされた¹⁰⁾。いずれも、佐田をたんなる復古主義者としてではなく、明治初期の民衆社会の一側面を映し出す象徴的存在として扱う点で、共通している。最近の論者である奥武則は、日本独自の「開化」を構想した佐田の思想を「小国寡民の思想」とであると述べ、西洋の「文明開化」と対峙するそのあり方を積極的に評価する。そして、著作の特徴として「数字による実証」を挙げ、そこに「開化の子」たる知識人・佐田の姿を指摘するなど、「開化」の政府と「迷蒙」なる民衆の間に位置する微妙な存在としての佐田像を描きだした点で、注目すべき論考であるといえる。

だが、こうした先行研究を概観したとき、重大な共通点に気づく。佐田の言説や行動の〈変化〉について、ほとんど言及していないのである。いったいなぜなのか。

筆者はこう考える。建白家・佐田、あるいは「ランプ亡国論」の演説家・佐田、その一貫した「自家独特」な——「奇人」的な思考と行動をみる、という暗黙の枠組みが、各論者に少なからず影響しているのではないかと。後に示すように、佐田も言説や行動の上でさまざまな揺れを示している。そうした微妙な変化を、「奇人」というレッテルは遮蔽し不問に付してしまうものである¹¹⁾。もちろん、単純に「奇人」であるとのみ断言する研究はない。しかし誤解を恐れず言うなら、佐田をとりあげる時点で、「奇人」への好事家的関心から自由ではないの

が実際のところであろう（本稿とてそれは同じである）。だがそれを自覚するなら、一色に塗り込めず、変化の側面に注目すべきだというのが、筆者の立場である。そこで、本稿ではまず佐田を全国的に認知せしめた「ランプ亡国論」に至るまでの思考の軌跡を追うことを課題とする。一方で、演説や結社の実際、そして従来ほとんど顧みられてこなかった人的つながりについて可能な限り明らかにする。以上の作業から、明治初期における佐田のすがたを浮かび上がらせたい。そして最後に、佐田の「奇人」というレッテルがもつ意味について、あらためて言及する。

なお、読みやすさを考慮して、引用史料中に適宜句読点を補ったことを断っておく。

第一章 その足跡と仏教天文学研究

1 在所と著作活動

佐田の生涯について記した著作は、佐田の死後まもなく、仏教系の隔日刊新聞『明教新誌』に1883（明治16）年3月6日から連載（全3回）された小伝、およびそれに増補して翌4月上梓された『等象斎介石上人略伝』（耕文社、1883）が最初である。著者は佐田の高弟、仁藤巨寛であった。「等象斎」と号した師への追悼の意が色濃い文章であることが随所に窺えるが、先行研究はこの『略伝』、およびその記述にほぼ依拠した浅野研真の著書をもとにすすめられている。よって、『略伝』を他の史料とつきあわせつつ、基礎的な事項を押さえておきたい。

まず在所である。文政元（1818）年、肥後国八代郡鹿島村の浄立寺（浄土真宗本願寺派）住職・広志慈博の子として生まれた佐田は、文政7年ごろから同村の儒医斎藤宗源について学び、同13年には庵を結び学問にいそしんだという。幼名は観霊、のちに字断識。その後、飽田郡小島村（現熊本市小島中町）の本願寺派正泉寺の養子となり、佐田姓を名乗るようになったようである。そして天保6（1835）年、本願寺派の学林での学問修行のため京都へ出る。このころ、佐田は森尚謙『護法資治論』を読み、護法論の立場から天文研究の必要性を痛感し、弘化4（1847）年に当代随一の天文学者、天竜寺・環中のもとへ赴く。そこで天文学や易学を学び、最初の著作『周易三千年眼』を書きあげ、さらに修行したのち学林に帰錫した、とされる（『略伝』2丁裏～3丁表）。仁藤巨寛は、師の修行の激しさについて、「白日と雖とも戸を閉ち故らに室を暗くし昼燈を懸け沈思黙考すること十有余年」と紹介している（3丁表）。だが後述するように、環中のもとへ赴いて6年後の嘉永6（1853）年には学林に戻っているとみられ、すくなくとも「十有余年」の門外不出というのは誇張と考えられる。やがて明治に入ると、佐田は京都を離れて東京へ移る。仁藤によると、明治3（1870）年にまず両国・回向院の住職であった福田行誠のもとに身を寄せ、そこで一年余り滞在し、ついで浅草寺の住職・唯我紹舜の招きに応じ、その別亭にまた一年ほど寄留したという（5丁裏～6丁表）。ただしこれも留保が

要る。次章でみるように、明治3年末には富山へ出張しているうえ、建白書のなかには、上京は少なくとも明治4年末以後と解釈される記述もみえる。よって、東京に在った期間については検討の余地がある。このうち、愛宕下一丁目青松寺内考寿院（曹洞宗）¹²⁾、浅草・桃林寺（臨済宗）¹³⁾、小石川区新小川町・土族高橋精一方¹⁴⁾などを転々とし、1879（明治12）年末には浅草新堀・東光院（天台宗）の住職となっているが（10丁裏）、翌年にも自らを「在浅草桃林寺」として名乗っている¹⁵⁾。以上のように、東京での所在地やそれぞれの在留期間はつまびらかではないが、浅草や小石川を中心にいくつか拠点を持ち、それらを渡り歩いたことは確かなようである。

つぎに、佐田の活動の概略をつかんでおこう。基本的には、幕末・明治ゼロ年代・明治10年代という3つに時期区分することができる。すなわち、幕末期に仏教天文学の研究にいそしみ、明治ゼロ年代には多数の建白書を提出、そして明治10年代に入り著書の公刊と演説活動に精を出す、といったおおよその傾向が看取できるのである。

この活動の区分について、著作群を中心に検討しよう（【表1】参照）。第一期、すなわち明治維新以前では、天文学の研究と、それ以外に二つの活動が注目される。ひとつは、仏典精読のための基礎研究である。その成果として嘉永年間（1848～1854）以前に脱稿したとされるのが、『助字櫟』『虚字櫟』『実字櫟』の三部作である。もっとも、刊行が確認できるのは『助字櫟』のみである。これは漢籍を読みとく際に必要な助字についての手引き書で、安政5（1858）年2月に自序文を記し、文久元（1861）年秋には全8巻を京都で出版している¹⁶⁾。もうひとつは、政局に深く関わる人物への建言である。浅野研真によると、佐田は文久2年9月、三条実美が攘夷勅命伝達のため江戸へ下向するに際し「送別ノ餞トシテ建白」しており¹⁷⁾、元治元（1864）年にも、幕府の長州征伐の意向を知り、松平容保に謁見し征長を思いとどまるよう建言したという¹⁸⁾。『略伝』にも、佐田が京都を出て長州へおもむき「木戸公〔孝允〕に謁して国事を談ぜら」れたという記述がみえる（5丁表）。しかし、今日伝わっている建言書は松平容保に上申したものだけであり、真偽のほどは確かではない。

とはいえ、政府要人に自説を訴えるという行動様式は、第二期（明治ゼロ年代）へつながっていったように思われる。この時期の佐田は、上述のとおり東京に移っており、そこで建白書をさかんに提出してゆく。『略伝』には、佐田が明治3年から同5年のあいだにもすでに建白活動に力をそそいでいると述べられているが（5丁表～裏）、現存するのは1873（明治6）年から1875年にかけての11点（左院受領6、参議木戸孝允宛、左大臣島津久光宛各2、太政大臣三条実美宛、宛先不明各1）である¹⁹⁾。内容は経済論、地動説批判、キリスト教批判、征台時期尚早論、聖徳太子顕彰論など多岐に渡るが、いずれも議論の重なる部分がある。一例として、1875年1月左院落手の「耶蘇建白」を見てみよう。これは、「其属国を求る必ず先ツ教法を其国へ入る」²⁰⁾という西洋諸国のありように対し、いくつかの項目を列挙して批判したものである。こ

人 文 学 報

【表1】 佐田の著作群

No.	転載	年 月 日	形態	題 名 など	分野	備 考
1		弘化4年	著書	『周易三千年眼』	天文	
2		文久元年晩秋	著書	『助字櫛』全8冊	漢籍	序文は三条実万、広瀬旭莊、野々口隆正
3		文久2年9月	建白	「送別ノ餞トシテ建白」	政治	三条実美宛
4		文久3年	著書	『鎚地球説略』	天文	
5		元治元年7月	建白	幕府征長につき慎重策を求める建白書	政治	松平容保に謁見上申
6		慶応元年	著書	『耶蘇興廃年表』	排耶	
7		慶応3年以降	論文	『闇中案』	天文	
8		このころか	論文	『雰圉論』	天文	
9		明治3年か	建白	「窃試」	政治	
10		明治5年8月頃	著書	『教諭凡』、『教諭凡道案内』	教化	
11		明治6年1月10日	建白	「富国議」	経済	
12		明治6年夏	論文	「天文地理ノ疑問」	天文	
13		明治7年9月10日	建白	「清国不可討之議」	外交	
14		明治7年9月28日	建白	「富国策二十三題・附桑茶論」	経済	
15		明治7年12月8日	建白	「地動説疑問」	天文	
16		明治7年か	建白	「御利益見込書」	経済	島津久光宛
17		明治8年1月	建白	「耶蘇建白」	排耶	
18		明治8月1月	建白	「諸宗寺院連名建白」	仏教	
19		明治8年2月	雑誌	『世益新聞』第1号	仏教	
20	←18	明治8年3月	雑誌	『世益新聞』第2号・同附録	仏教	
21		明治8年4月	雑誌	『世益新聞』第3号・第4号・同附録	天文	
22		明治8年6月10日	建白	「富国ノ建策貫通センコトヲ需ムル書」	経済	木戸孝允宛
23		明治8年6月下旬	建白	「聖徳太子追賞ノ議（大日本大聖伝）」	仏教	
24	←23	明治8年6月	雑誌	『世益新聞』第5号	仏教	
25		明治8年7月29日	建白	「建言ヲ通セント乞書ノ二」	経済	木戸孝允宛
26		明治8年9月	建白	「朝鮮事件献策」	外交	三条実美宛
27		明治9年2月	雑誌	『世益新聞』第6号	仏教	
28	←12	明治9年4月	雑誌	『世益新聞』第7号	天文	
29		明治9年4月	雑誌	『世益新聞』第7号附録	仏教	
30		明治9年7月	雑誌	『世益新聞』第8号	経済	
31		明治9年8月	雑誌	『世益新聞』第9号（終刊）	経済	
32	←22/25	明治9年10月	雑誌	『掌珍新論』第1号	経済	4銭、枕流社発行
33		明治9年11月5日	雑誌	『掌珍新論』第2号「人民疲弊ノ本」	排耶	7銭、同上
34		明治9年	論文	地動説五箇条の批判書	天文	アメリカ人宣教師ウィリアムス宛
35		明治10年8月10日	論文	対外貿易の是非について	経済	『東京日日新聞』掲載
36		明治10年8月	著書	『視実等象儀記』初篇	天文	序文は山岡鉄舟、高橋泥舟
37		明治11年5月末	著書	『栽培経済論』初編	経済	40銭。序文は中村正直、栗本鋤雲、井上穀、重野安釋
38		明治12年6月	著書	『仏教創世記』	仏教	7銭（15年1月には15銭）
39		明治12年9月	著書	『栽培経済論』後編	経済	50銭。序文は柳原前光、桜井能監
40		明治13年1月	一枚	『富国歩ミ始メ』	経済	
41		明治13年2月	著書	『視実等象儀詳説』	天文	30銭
42		明治13年7月16日	論文	「ランプ亡国の戒め」	経済	『東京日日新聞』および『明教新誌』掲載
43	←34	明治14年1月	著書	『天地論往復集』	天文	
44		明治14年8月	著書	『日月行品台麓考』	天文	
45		明治14年12月20日	雑誌	『栽培経済問答新誌』第1号	経済	
46		明治15年8月16日	雑誌	『栽培経済問答新誌』第40号（休刊）	経済	
47	←35	明治16年6月	著書	『点取交通論』	経済	校訂は大伴義正、森祐準。佐田襲石（養子）との相談の上刊行
48		明治16年7月23日	著書	『全国商法の栽培』初号	経済	
49		明治21年12月7日	著書	『天地論往復集』続編	天文	門人阪田和光校訂、序文は釈雲照ら
50		明治23年	著書	『葬忌彼岸会説・須弥山一目鏡』	仏教	
51	←17/26	明治26年12月	著書	『仏教開国論』	仏教	豊国義孝編集

※「No.」「転載」の項は、たとえば「24」「←23」の場合、「聖徳太子追賞ノ…」が『世益新聞』第5号に転載されたことを示す。

の建白で佐田は、西洋諸国が「所謂教商戦の三法を以古来人の国を吞ミ来れる処の通商」²¹⁾、そしてそれを導く先兵たるキリスト教の存在を、鋭く指摘する。ここでは、単にキリスト教を教義の面から、あるいは国体という観点から非難するだけでなく、「通商」の観点からの指摘も色濃くうちだされている。つまり、排耶論として分類した建白書も、そこにとどまらず、議論の中心と関連する話題へと大きく移ってゆくという特徴をもっている。さらにこの時期に目立つのが、自分が書いた建白書を、自分が編集する雑誌に掲載して、世に知らせようとした点である。1875（明治8）年3月刊の『世益新聞』第2号附録には、同年1月に相国寺・荻野独園、久遠寺・新居日薩ら、各宗派の高位にある僧侶たちが連名で出したとされる建白書を転載しているが、1893年に上梓された豊国義孝編『仏教開国論』にこの建白書が採録された際、じつは佐田が書いたものであると明らかにされている。また、1876年10月刊の『掌珍新論』第1号も木戸孝允宛の2つの建言書に掲載している。

こうした建白・建言から雑誌へというパターンの背景には、1875年5月の左院廃止という事情があると思われるが、その結果、佐田が自説を世論へ訴えかける際に複数の媒体を意識するようになったことは重要である。それがそのまま、最晩年の第三期（明治10年代）の大きな特徴となるからである。【表1】をみてもわかるように、この時期に今までの持論を集大成するかたちで、『栽培経済論』『仏教創世記』『視実等象儀記』などの単著をつぎつぎと刊行してゆく。その一方で、そこで論じた舶来品排斥論や天文論を各地（関東～京阪）へ出向き頻繁に演説している。さらに、新聞への投稿、雑誌『栽培経済問答新誌』の刊行などをつうじ、くりかえし自説を披露するのである。

こうして三つの時期をみると、佐田の活動は自説を訴える伝達媒体の獲得、および複合化という過程であることがわかる。しかも、それぞれの時期が媒体によって単純に区切られるのではなく、重層的になってゆく過程とも捉えられる。この点を「連続」面とすれば、1875年までの建白活動が以後全く姿を消し、かわって第三期からその力を新たな活動＝演説にかたむけることになる点は、「断絶」面として指摘できるだろう。佐田の活動は基本的にこの三分区に従ってよいといえるが、佐田の言説をつぶさにみてゆくならば、こうした「連続」「断絶」を内包していることも念頭に置くべきである。

2 仏教天文学者として

本稿の課題である経済論に入る前にもうひとつ、佐田の仏教天文学研究について述べておきたい。ただし、その天文論の内容に深く立ち入るというのではなく²²⁾、ここでは史料にあらわれる研究活動のすがたを描いたうえで、佐田にとっての仏教天文学が持った意味を考察することにした。

西本願寺学林での佐田の動向については、学林の日誌である『学林万検』の巻十七から巻二

十一『龍谷大学三百五十年史』史料編第2巻（1989）所収、以下引用は頁数のみ記す）から垣間見ることができる。この記録で最初に佐田についての記述がみえるのは、嘉永6（1853）年7月24日の条、「肥後観霊、午之刻出殿之事」というものである（p.306）。何のために本山への「出殿」を命じられたかは定かではないが、当時は「介石」ではなく、まだ幼名の「観霊」を称していたことがわかる。同年9月6日の条では「六日、呼、肥後観霊得業願書ニ奥印可致候事」とあり（p.308）、この頃の佐田は得業、つまり学林で一定の修学をへたのち試験に合格した者に与えられる最初の学階（本願寺派では、得業の上に助教、その上に司教、そして頂点に勧学）を得ようとしていたのであり、学僧としての階梯を登りはじめる時期といえる。

その後も、佐田は着実にその階梯を進んでいったようである。安政3（1856）年9月17・18日に、得業から助教への昇級試験として「下会読」（口頭試問）が行われているが、論題は「論註往還二相」「選択集悉有仏性」の出題者の一人として、佐田の名前が挙がっている（p.349）。通常、助教昇級試験の「下会読」はすでに助教の位にある者が出題することになっていたのですが、佐田は嘉永6年9月以降に得業となり、安政3年9月以前には助教に昇級していたことになる。ついで、安政5年9月17日の助教試問にも出題者をつとめたとの記述がみえる（p.410）。また文久2（1862）年1月14日には、助教の得聞・宣正、得業の鵬翼とともに、学林に集う僧侶たちの「学問御引立世話役」にも命ぜられている（p.534）。佐田が学林において、周囲に広く認知される存在であったことがわかるであろう。

その知名度を高めたのが、天文研究であった。安政2（1855）年2月22日の条をみてみよう。この日、西本願寺本山の学林御用掛である松井中務ら三名が、学林の寮へ出張してきた。用向きは、佐田に「梵曆天象器之事」の仔細について尋ねることであった。その事情について、『学林万検』ではこう記録されている。

先達而在寮昇階中衆評之上、出願致候儀ハ、梵曆須弥界之説ニ付、西洋曆家ヲ難破致候、右者漢土ニモ右回曆伝来致候而、終ニ仏法漸滅致候由、諸書ニ在之、当時海内ニ蘭曆地動之説大ニ被行、儒神之徒も与党致候而仏法を破斥致候ニ付、何卒右須弥界之説申立、外難を隔、西洋曆を反破致度旨、多年苦心致候事ニ付、幸此節肥□観霊天竜寺環中禅師へ随從致而曆学も増進、其上外曆之難を通し、且反破致度由申出候ニ付、林門ニ於而天象器制造被下度申出候ニ付、衆評之上願出候儀ニ付、為取糺右御用掛出役ニ相成候事（p.325）

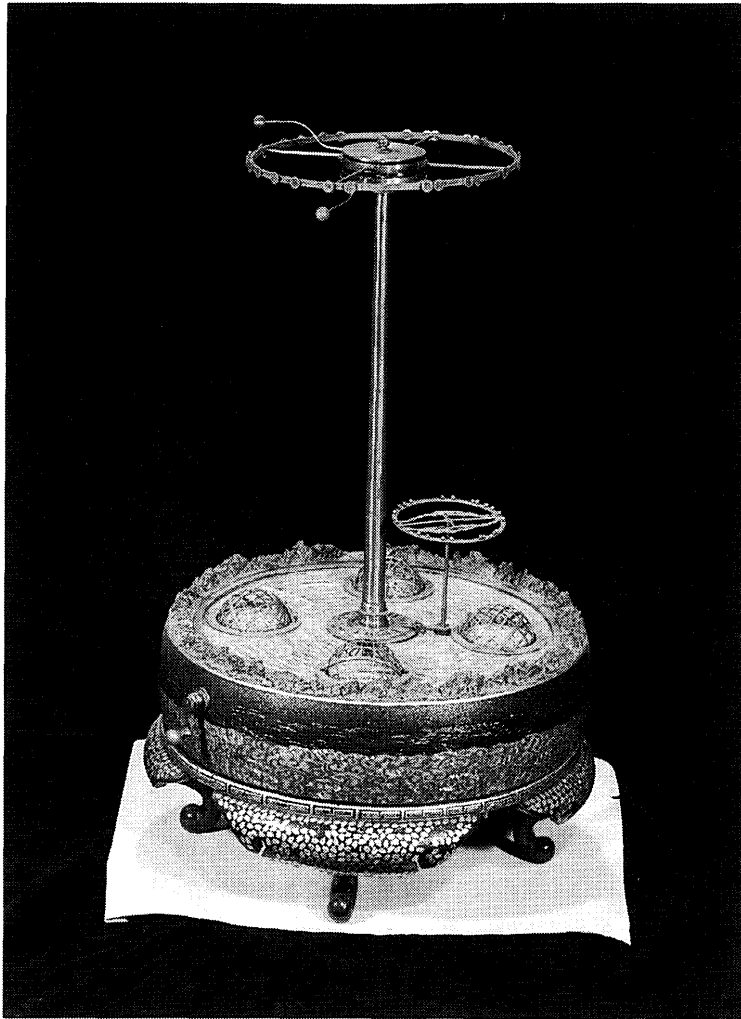
近年太陽暦や地動説が流行し、儒学者や神道家もそれに与して仏教を排撃しようとしている。こうした状況に、「須弥山説」にもとづく天文論を学んだ佐田が、その学識を生かし天文の器械を製造することで対抗したいと申し出たのであった。

この背景について少し述べておこう。18世紀後半から、長崎のオランダ通詞本木良永や志

筑忠雄らによって、蘭書をつうじて西洋の地動説が本格的に紹介されるようになっていた²³⁾。これは仏教界にとって重大な問題であった。なぜなら、それは仏教教理にのっとった世界観である須弥山説の反駁であり、仏教への挑戦をも意味したからである。須弥山説では、世界の中央に大高山・須弥山が聳え、その中腹を日月が廻っている。そしてその山麓から最も外側、東西南北に四つの大陸があり、南に位置する大陸に我々は存在する。つまり我々が目にする天体の航行は、須弥山の周りを天体自身が廻っている様子である、と説明される。したがって須弥山説に基づく天文論は、まさに天動説であった。かくして天文を研究する学僧は、僧侶のなかでもいち早く、「西洋」との対峙を迫られることになる。19世紀初めごろ、古今東西の天文学理論と仏典における天文論とを融合した学僧・普門円通があらわれた。彼によって「仏教天文学」の体系化が図られ、また暦の作成・頒布や天文観測実験などの活動が広がっていった。時代が下るにつれ、護法意識の高まりもあって天文学研究は進展し、円通の弟子のひとりである環中は、師の説を継承しつつ理論的な矛盾を修正する方向で研究を深めていった²⁴⁾。佐田はその環中に師事して天文学を研究するなかで、かつて円通の作ったモデル（須弥山儀など）に自分の研究成果をとりいれて改良し、新たな器械を製作したいと学林御用掛に申し出たのであった。それに対して、松井中務ら御用掛は、衆議のうえ本山へ申請するため、詳細を聞くべく佐田を訪れたのである。

その結果、佐田の申し出は承認され、安政2年の夏に「視実等象儀」という器械を完成させる。これは、「からくり儀右衛門」と呼ばれ名高い久留米の職人・田中久重の手になるもので、佐田の天文論を集約した模型器械である【図2】。中央にある長い心棒が須弥山を、その上の輪が天体の航行を示す。四つの大陸はその周囲に配置されている円形部分である。地球にあたる南の大陸は図の右手にある。佐田の天文論の重要な点は、太陽や月などの天体は見かけ上、大陸を覆うドーム部分の天空（視象天）を航行しているかのようであるが、じつははるかに上空に、須弥山の回りをめぐる本当の天空（実象天）が存在する、という点である。さらに視実等象儀では、天体は実際に北極星を中心として航行しているのではないか、という反論にも答える仕組みになっている。南の大陸のすぐ上空に、細い心棒に支えられた小さな輪がみえる。これを北極実象天と呼び、実際の北極星のある位置を示す。これと重なってしまうから、実象天は北極星に隠れて全貌が見えず、はるか遠くにあるはずの太陽も月も北極星の回りを廻っているように見えてしまう、と遠近法の論理で説明するのである。

この視実等象儀の噂は広く知れ渡っていった。安政6（1859）年2月29日には郷里の熊本藩主・細川斉護が江戸出府の途上、西本願寺を訪れ等象儀の観覧希望を申し出た。佐田は付添いの僧侶2名とともに、伏見の宿舎まで等象儀を自ら持参して斉護に見せている（p.418）。そして翌3月22日には、門主広如の「御上覧」にも供することになった。この日は巳の刻に看護の亮恵、付添い僧侶2名とともに西本願寺本堂へ参殿した。その際、学林御用掛川勝十之丞



【図2】 視実等象儀（国立科学博物館所蔵，田中聡『怪物科学者の時代』晶文社，1998より）

から、ここ本堂で等象儀を組み立てて大奥へ運べとの指示をうけた。亮恵は介石を代弁するように、運ぶ際に「仕掛けくるひ候てハ無詮候」と伝えた。それに対して川勝は、等象儀を書院へ運び、組み立て方を本山の御道具方に示したうえで、大奥で彼ら御道具方が組み立てるというのではどうか、と代案を述べた。だが亮恵は、「云何様成共思召ニ任候、乍併先以申候通り平常之器にてハ無之、介石数年精心研候品なれハ、御道具方風情之一朝ニ心得候共、不存云何」と切り返した。佐田が何年も心を砕いた末に作りあげた精緻な器械を、ちょっと見ただけの御道具方なぞに扱えるはずがない、と考えたのである。佐田がすでに天文研究の学識と等象儀で知られた存在であり、学林内でも支持されていたことが、ここからも明らかであろう。亮恵の主張によって、結局は組み立ても「御上覧」も書院で行うこととなり、未の刻に首尾よく

終えたという（以上 p.420）。この直後、佐田は本山に等象儀の修復費用支給を伺い出、3月27日に了承をえている（p.421）。『学林万検』には等象儀が損傷したという記述は見当たらないが、佐田がその手入れに細心の注意を払っていたことがうかがえる。だが文久2（1862）年夏、等象儀は京都の騒乱にまきこまれ、焼失してしまう。佐田の衝撃はきわめて大きかったに違いない。

それでも佐田は、天文学の研究成果を着々と文章にまとめてゆく。翌文久3年脱稿の『鈍地球説略』（別名「日本鈍」）では、アメリカ人 R・Q・ウェイ（樟理哲）著の天文書『地球説略』を痛烈に反駁した。ついで問答体の『闇中案』²⁵⁾、さらには『雰囲論』を書きあげた²⁶⁾。東京に移ってからも【表1】のとおり、天文に関する著述を重ねてゆくが、見逃せないのは、1877（明治10）年に視実等象儀を再び製作していることである。佐田は、寄付金を有志に募り、前述の田中久重と熊本の職人・松本喜三郎に製作を依頼して、できあがったものを同年夏に東京で行われた内国博覧会に出品したのである。

佐田の天文論やその活動は、地動説を中心とした西洋天文学の普及にどれほど対抗できたのであろうか。政府の見解としては、1873（明治6）年から太陽暦を採用していることから明らかに、西洋天文学、地動説を採っていた。学校では L・C・ボンヌ著『泰西勸善訓蒙』（箕作麟祥訳）などの教科書で地動説が教えられており、それを非難する教導職と、学校教員や地方官とのあいだでしばしば摩擦を生じてもいた。そうした摩擦をきっかけとして、1876年6月22日には教部省が須弥山説説教の禁止を口達して、公式に天動説否定の見解を示すに至った²⁷⁾。しかし、その後も佐田は須弥山説を基本とした天文論を説くことを止めなかった。【表1】でもわかるように、1880（明治13）年から翌年にかけて『視実等象儀詳説』『天地論往復集』『日月行品台麓考』と天文論の著作をたてつづけに刊行している。

とはいえ、それへの反発もまた大きかった。たとえば、1878年6月12日、神奈川県・伊勢山（現横浜市区）において、天文論につき演説を行ったさい、聴衆のある師範学校生徒が佐田の「地球平面説」について疑問を訴えてくるという事態が生じている²⁸⁾。これには佐田も返答に窮したというから、よほど厳しく詰め寄られたのであろう。1880年10月29日に京都・円山で行われた第2回同志社演説会でも、同志社学生綱島佳吉が「天が動くか地が動くか」と題した演説において、同様の批判を行っている²⁹⁾。佐田はこのころ京都を巡回しており、その天文演説が一部に大きな反発を呼んだのである。同年11月20日には、大阪府西区北堀江で、天動説・地動説について前大阪府学務課長日柳政^{くさなぎ}愼との公開討論に臨んでいるが³⁰⁾、これも日柳の反発から実現したものと思われる。西洋科学の伝播がすすむなかで、公的に須弥山説が否定されたことによって、仏教天文学は衰退してゆく。大勢として佐田の「抵抗」はあまり力をもつことはなかったようである。

以上、天文学者としての佐田のすがたを描いてきた。幕末期の仏教者として、佐田がキリス

ト教に対する護法意識を強くもっていたことはいうまでもない。とくに佐田の前半生は天文研究に費やされており、西洋天文学への対抗という命題は、他の僧侶以上に「対西洋」の意識を要請したと思われる。そこから西洋を「所謂教商戦の三法」でもって侵略する勢力ととらえ、「商」すなわち経済を視野に入れるようになったのであろう。

また岡田正彦は、幕末の仏教天文学の進展について、それが単なる護法論的立場から行われたわけではなく、「科学」として定立しようとする方向性をもっていた、と重要な指摘をしている。岡田によれば、学祖である円通は「西洋との対峙」というより、「実学的」で時代の要請に応じた新しい学問としての「仏教天文学」創始を直接の目的としており、佐田の師・環中も論理的整合性を求める「科学」としての仏教天文学を強調していた³¹⁾。佐田の場合、護法意識から天文研究へ足を踏み入れたが、環中から仏教天文学を学び、円通の理論を保持するのではなく、より説得力のある説明を追求した。視実等象儀を制作したのも、批判者と向き合って論争に臨んだのも、そうした厳密さ・実証性を求める態度のあらわれであったといえるだろう。そして、仏教天文学の「実学」志向は、世界観を扱う学問であることとあいまって、経済論へ目を向ける広い視野を養ったとみることもできるかもしれない。

佐田にとって仏教天文学の研究は、学僧として知名度を高めることになっただけでなく、天文にとどまらない「西洋」との対峙という、問題意識の基盤を形成する意味ももった。そして、そのための方策をいかに説得的に訴えるか、を特に念頭において活動してゆくことになるのである。

第二章 ランプ亡国論への道

1 経済論の出発点 ——『教諭凡道案内』より——

幕末期の仏教天文学研究を経た佐田が、経済ないし貿易についての専論を「外」へ向けて披露したのは、管見のかぎり 1873（明治6）年1月が最初である。ではなぜ、この時期に経済論を展開してゆくことになったのか。そして、それが1880年、佐田の知名度を決定的に高めた「ランプ亡国の戒め」を発表するまで、どのように変容していったのか³²⁾。本章では、明治期に入ってから佐田自身の文脈に即して、この問題を考えることにしたい。

明治3（1870）年末、西本願寺本山は佐田に、富山への派出を命じた。富山藩では、大参事林太仲らを中心に、領内の寺院313か寺を各宗1寺、計8寺のみに全て合併せよ、という苛烈な排仏政策が行われようとしていた。県内の明徳寺らは同年10月29日、そこで生じた混乱への対処を本山に訴えてきた。そこで、富山藩に対しその中止を申し入れるため、本願寺派は佐田を派遣したのである³³⁾。佐田が現地でいかなる活動を行ったかは、明らかではない。だが、それまで本願寺の学僧として研究に力を注いでいた佐田にとって、富山への派遣は排仏という

風当たりの強さを肌で感じるできごとであったに違いない。前章で考察したように、佐田はキリスト教という仏教の「敵」には早くから意識していたが、維新政府による神仏分離の方針が仏教抑圧ヘエスカレートしているという現実を知り、大きな転機を迎える。そこで佐田は、まず社会全体の仏教への支持を回復する道を模索してゆく。このころ、浅草寺住職・唯我韶舜、回向院住職・福田行誠ら、宗派の別なく高名な僧侶のもとに身を寄せ、交流をふかめたのもその一環であったと思われる。

そんな佐田にとって、活動の道筋を決めるうえでひとつの重要なきっかけがおとずれる。明治5（1872）年3月、神道国教化政策をすすめてきた神祇省が廃止され、ついで教部省によって神仏合同教化政策が企図されたのである。同年4月には教導職制が敷かれ、「三条教則」（敬神愛国・天理人道・皇上奉戴朝旨遵守）のスローガンのもと、全神官・僧侶が民衆へ天皇崇拝、人倫道徳を説教する任（教導職）にあたるという方針が明らかにされた³⁴⁾。それまで神道中心で仏教を冷遇してきた政府が方向転換し、僧侶を国家有用の存在として認知したのだ——佐田はこの政策を歓迎し、いち早く反応する。この教化活動にあたって、神官・僧侶たち教導職は種々の説教用テキストを書いており、そのほとんどが1873（明治6）年以降に上梓されたものであるが³⁵⁾、佐田はすでに明治5年8月の段階で、『教諭凡』『教諭凡道案内』の二冊を刊行している。とくに後者は、三条教則を説教する教導職への心得書であり、前者の仏教教理解説とあわせ読まれるよう書かれたものと思われる。それだけ佐田が、民衆の仏教支持を確保したいという希望と期待をもって、この活動に取り組もうとしたようにも受け取れる。しかし『教諭凡道案内』の内容は、単純な教化政策礼賛ではなかった。期待と同時に、あるいは期待ゆえに、教化政策の限界をこのように指摘していた。

愛国トハ、之ニ就テハ大ニ心得分クヘキコトアリ……中人已上ト中人已下トハ大ニソノ別アリ。ソモソモ愛国ト申スコトハ、広ク天下国家ニ及フコトニテ、ナカナカ中人已下ノモノ、思慮分別ノ届クヘキコトニアラス。中人已下ノ愚民ハ纔カー身ヲ愛シー家ヲ愛スル迄ノコトニテ、隣家ノコトダモ喜憂ヲ同フスルコト能ハス、マシテ況ヤ天下国家ノ広キヲヤ。タトヒ如何ホド巧ニ説キ諭ストモ、山家獵村ナドノ賤民ハ国ヲ愛シ国ヲ憂ル理ヲ知テ国ヲ愛シ国ヲ憂ルナド、申スコトハ、容易ニ行ハル、コトニアラス。国ヲ憂ヘ国ヲ愛スルナド、申スホドノ大ヒナルコトハ、実ハ是レ中人已上ノ任ナリ³⁶⁾。

『教諭凡道案内』が主題とするのは、三条教則のなかの「愛国」、その涵養である。その前提として佐田は、社会が「中人已上」と「已下」とで区別して考えるべきだという基本的な見解を表明する。そのうえで、そもそも「中人已下」の者たちには三条教則の高尚な説教では「愛国」など意識しえない、と画一的な教化方針へ苦言を呈し、別の方法を次のように論じる。

家族下女下男ニ至ルマデ、ソノ主人ノ恩恵ノ厚キ慈愛ノ深キニ感服スルトキハ……身ヲ捨テ死ヲ惜マズ蔭日南セズ、ソノ主人危急ヲ扶クルニ至ル……延テ之ヲ一國ノ大事ニ及サハ、一國ノコト皆然リ。天下ノ民匹夫匹婦ニ至ルマデ、天恩ノ厚キ国恩ノ重キニ感スルトキハ、國ニ危急ノ事アルニ臨テ、倉ヲ傾ケテ財ヲ出ストモ惜マス、又粉骨碎身ノ苦勞ヲイタシ、身ヲ捨テ命ヲ抛ツトモ厭ハサルニ至ルモノハ、是レ中人已下ノ愛國ナリ³⁷⁾。

あたかも下女下男が、「主人ノ恩恵」に感服してその主人の一家を愛し、一身を捧げるようになる、そんな感情を国家に対しても抱くということが、「中人已下」の「愛國」である。そのためには、主人が使用人に与えるごとき「恩」、すなわち「天恩」「国恩」を人々に感得せしめる必要があるのだ——佐田は、説教だけではほとんどの民衆を教化できないと見抜いていた。そして、天皇ないし政府が「天恩」「国恩」の内実を備えることが先決だ、と次の課題をも見いだすのである。

この政策の内実や自らの関わり方を洞察することで、佐田は新たな歩を踏み出した。お題目を説教するだけで効果の薄い教化活動によってではなく、すでに行ってきた建白活動によって「天恩」「国恩」にふさわしい政策構想を訴えること、それに専心することで仏教者として「中人已上」「已下」の社会全体に寄与しうると考えるに至ったのである。

2 消費による「富国」——建白「富国議」から「二十三題」へ——

ではその「国恩」をどのように備えるべきか。これが、佐田の経済論の出発点である。1873(明治6)年1月、佐田は「富国議」と題する建白書³⁸⁾を左院に提出する。題名にあるごとく、その課題設定は急務たる「富国」にあった。富国策に取り組むことで「一ニハ御国債ヲ還ヘシ、二ニハ従来渡シタル貨幣ヲ取戻シ、三ニハ外国ノ貨幣ヲ取テ畜積ヲナス」³⁹⁾べきであるとしたのである。多額の外債や外国への正貨流出への危機意識は、当時のさまざまな富国論にみられるが、佐田はその克服方法、すなわち「富国」の方法を「片時モ早く、諸事ヲ閣テ手技製造ノ工産ヲ興」すことに求めた。佐田はいう。従来日本の重要な輸出品であった茶や生糸といった天然の産物では、気候にも左右されるうえ、利益は少ない。むしろ、人造の物品を生産することこそ重視すべきである。理由は三つある。一、たとえば綾錦の生産にあたっては、まず紡績業が盛んになり、ついで織機製造が必要になろう。他方、染物業の需要も高まり、付随して染料、刷毛などの製造業も繁盛する。したがって国内産業全体の振興に寄与するのである。二、日本人の手先の器用さは「皇国固有ノ性」であり、「手技製造」にはもってこいである。視実等象儀を製作した田中久重ら、名高い職人を三万人登用すれば、三年で国債償却は可能。三、早期の収益が見込める。開拓では利益を得るのに15年か20年かかるが、「工産」はすぐに利益があがるではないか——

三万人の職人？ 三年で国債償却？ 妙な数字が随所に登場する。その自信ありげな大きな数字で、説得しようとするのである。どこに根拠があるのか理解しがたいが、それを追及するのはよそう。ここでは、手工業の商品生産向上こそが「富国」につながるという、「国恩」の内実をそうした「富国」創出にみている点をまず確認しておきたい。そして、建白書を「前件上言仕処、経験ニ出タルニハアラス。敢テ御採用ヲ願フトコロニアラス。聊赤心ヲ表スルノミ」⁴⁰⁾と述べてしめくくっていることも見逃せない。おそらく前述の危機感の表明なども、護法意識ゆえのものとはひとまず解釈できるだろう。

ここから、実際の見聞を重ねて、佐田はあらためて富国論を提示することになる。翌1874（明治7）年9月に左院が受領した建白書をみてみよう。

これはじつに6万5千字にもおよぶ、他に類をみない長大な建白書で、圧迫感さえ感じさせる⁴¹⁾。序論と23の項目⁴²⁾からなり、さらに別に図表五枚と補論まで付している。先行研究でもまず注目されるのがこの建白書（以下「二十三題」と呼ぶ）で、くりかえし言及されている。長文をようやく読み切ると、先の「富国議」でも見たような叙述の特徴に気づく。牧原憲夫が佐田を「列挙魔」と呼んだように⁴³⁾、具体例や項目をたたみかけてゆく。だがそれらは、単なる羅列もあれば、「風が吹けば桶屋が儲かる」式とでもいうべき論理によって、つなげられている場合もある。たとえば団子を例にとりて、団子が売れる→もとなる米が売れる→米問屋が儲かる→米小売店も儲かる→粉屋も儲かる、あるいは団子が売れば、小豆・砂糖が売れる、その問屋・小売店もまた儲かる、と数珠つなぎの説明をしている⁴⁴⁾。また図表の多用や、内田魯庵が「数字のイリュージョン」⁴⁵⁾と評したような「もっともらしい」数字の枚挙なども指摘できる。

さて、肝腎の富国論である。佐田は、状況認識として「富国議」と同じく、「今日ハ御創業の御政事、御国債も被為在、万民塗炭の苦言語に絶したる」現状を指摘している。その打開策について、要点を捕捉すれば次のようになる。まず、前提として「皇国固有ノ開化」を強調する。これも「富国議」で少し述べてはいるが、「二十三題」では、日本と西洋との相違点を本質的なものとして論じている。地理や気候のみならず、【表2】のように、衣食住、顔かたちから、工業製品の生産方法、通商能力、天然産物の質などにいたるまで、両者の違いを列挙したのである。そのうえで「文明開化」について、こう述べる。

西洋ニハ西洋ノ文明開化有り。我日本ニハ日本の文明開化有り。総体文明開化と申事ハ、たとえハ暫ク物品の上に就て申さバ、自国固有の産物が初メ粗にして穢カリしが、後之を精にして美化する道が開けて国民に益ある処を文明開化といふへし……粗悪なる品が精美に化し無用の品と棄たれたる品が有用に可相成道が開けたる類を我日本の文明開化といふへし⁴⁶⁾。

【表2】 佐田のみる日本と西洋の身体的相違 (『明治建白書集成』第3巻, p. 926-927)

老死	幼智	成長	嗅	食	見	齒	二便	鼻	身	眼	顔	髪	
日本六十与二洋人四十粗等シ是老遲故死亦晩シ	日本十四五歳智与二洋児七八歳ノ智粗等シ	日本四五歳与二西洋一歳余童粗等シ	嫌二洋臭一	穀	暗中不能見且ツ見ルコト粗ナリ	生ル、時無レ齒七八月ニシテ始テ生且ツ有レ齲 ^{カハシバ}	連通	卑而短小又生 ^{ヨリ} 於二眉間一	短小	黒眼	温和也日本人は眉目ノ間広シ是温和也	黒シ 直シ 柔 細 長	日 本
洋人四十与日本六十粗等シ是早老故死亦早シ	七八歳ノ洋児智如二日本十四五歳智一是智早発故是	二歳余ノ洋児如二日本四五歳童一	不 ^{ルコト} 嫌二洋臭一 ^{ルコト} 喻如二海畔逐 ^ル 臭人一	肉也洋人食 ^{スルコトハ} 肉是天賦ナリ以三洋犬不 ^ル 穀食二可 ^ル 例知一	暗中能ク見ル且ツ見 ^ス 至細至遠一	生レナガラ而齒具ハル且ツ無 ^レ 齲	別通	高而長大又生 ^{ヨリ} 於眉間一	長大	碧眼、黄瞳	峻峻也洋人ハ眉目ノ間甚狭シ是レ峻相也	或赤或黄或白 曲ガリ 剛シ 剛シ 剛シ 短シ	西 洋

ここで示されるのは、日本独自の「文明開化」があり、それは国産品の品質が向上する道、そして無用なものが有用へ転化する道を開くことだ、との認識である。この認識から導き出される富国の方法は、「富国議」でみた手工業品の生産向上という次元ではもはやない。それにつながる「道」の次元、すなわち消費に力点を置いているのである。佐田はいう。「国ヲ富スノ道ハ消費ノ法ヲ広クスルニ如クハナシ。消費ノ法狭ケレハ随テ製造ノ道モ随テ狭ク塞ガリ、消費ノ道ヲ広クスレハ制作ノ道モ亦随テ広ク通ス」と⁴⁷⁾。物品製造の振興よりもまず、人々の

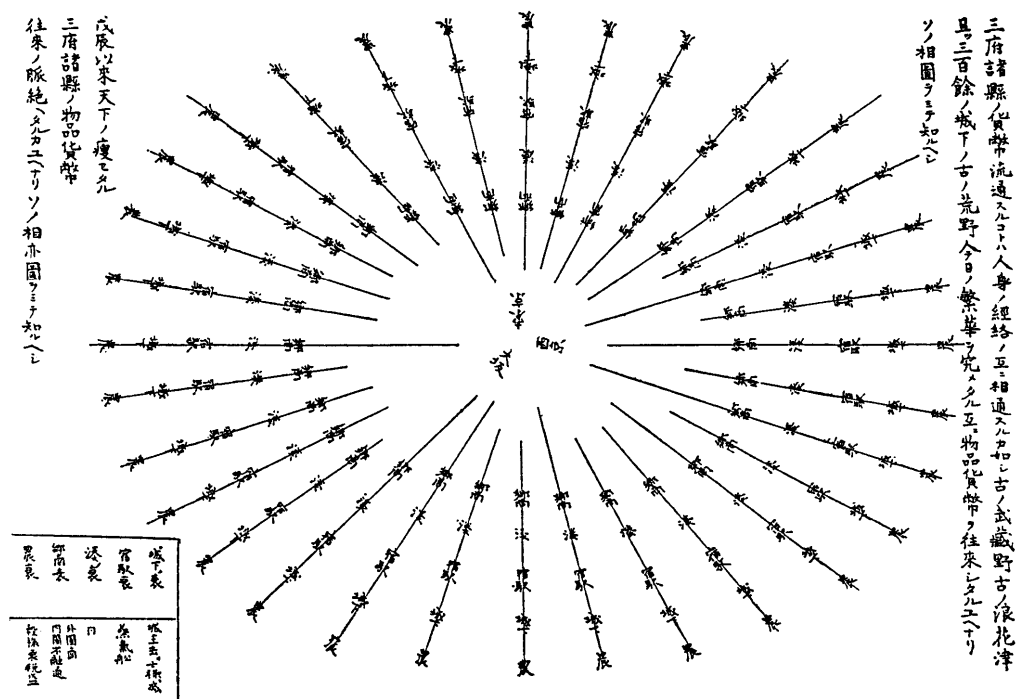
物品消費力自体の向上が最大の課題であるとする見方へとシフトしたことが、「二十三題」の大きな特徴である。

では消費力向上について、どこをポイントとみているのだろうか。

【図3】をみてもらいたい。建白書のなかの付図である。佐田は、国内の金銭の流れをこのように把握し、なかでも三都や城下町の復興が肝要であると論じる。なぜか。城下町には士族が多い。彼らはいまや尸位素餐の者として疎まれていたが、消費の面では大きな存在価値がある。また、造酒家、神社・寺院、医者、「俳優娼妓等ノ遊芸遊戯」も、人々の消費を刺激するという点で同様の価値を有する。彼らもこんにち社会的に無用視されている存在だが、消費という面から見れば実は有用といえるのだ——消費の重視と、無用から有用へという「皇国固有ノ開化」の強調。この佐田の認識からすれば、彼らの多く住む三都・城下町の復興が富国への緊急課題の一と映ったのである。

加えて、「節儉」という語も重要である。佐田の考えでは、単なる節約や倹約は「吝嗇」にすぎない。節儉とは、「己れが持前の分限相応の暮シを致す」ことであると考えている。そして、人びとの分限相応の消費活動について、次のように述べる。

貧富の別にて消費の多少異なる事ハ、たとへハ酒に上中下九品有り。到貧の者ハ下ノ下酒



【図3】 佐田のみる日本社会の流通構造図（『明治建白書集成』第3巻，p. 973）

を三合瓶にて求む。其次は下ノ中酒を五合瓶にて求む。其次は下ノ上酒を一升樽にて求む。其次は……上ノ上酒を求る者ハ四斗樽何挺或ハ何十挺買入可申如此。……故に物品を消費する事ハ万人の貧賤よりハ一人の貴人一人の富人に如カす。因て物品を消費する事ハ、富貴貧賤の段が繁多に分かるゝに及カズ⁴⁸⁾。

消費する側の暮らしぶりによって、金持ちは金持ちなりに相応の高価なものを買ひ、貧乏人は貧乏なりに安物を買うべきである。そうすれば、金銭の流通のうでで当然前者のほうが重要といえるが、それに増して貴賤の階層が細分化・固定化されることが大きな意味をもつ。それぞれに相応する質・値段の品物が求められ、消費のありかたが多様になり、それが「富国」への道を開くからである。佐田はこのような論理で節儉の必要性を示す。

そしてもうひとつ。正貨の海外流出を防止するという課題からすれば、西洋からの物品輸入などもってのほか、という認識である。西洋との本質的相違をことさら強調したのも、まさに西洋品排斥をポイントと見たからであった。具体的には、帽子、こうもり傘、ランプ、洋酒、煉瓦造りの庁舎、役所内で用いられる椅子などの物品を挙げ、それらがいかに日本に適合せず、害をもたらすものであるかを縷々述べている。本章の関心からすれば、この「二十三題」においてはじめてランプの公害について言及したことはむしろ注目すべきであるが、その内容については後述する。ここでは、「消費」が「国産品の消費」を意味する点を確認しておくにとどめたい。

以上、佐田は「二十三題」で、都会から（西洋ではなく）田舎へと国内のすみずみまで貨幣を流通させる構造を保障すること、それが「国恩」の内実たるべきとの結論をもって天皇および政府に要望⁴⁹⁾したのである。さらにいうなら、富裕な者から貧乏な者までを消費を軸としてつなげることで、「中人已上」「已下」を統合する「国家構想」をもっていたとみることができるとはならないだろうか。この解釈は決して読み込みすぎではない。佐田はこの建白書を1874（明治7）年末、三条実美・島津久光・岩倉具視の三大臣にも送付し、左院の返答を促すよう依頼しているが、その文面には次のようにある。

私儀右建白之ため昨秋以来心血を洒き相認、早已ニ貧囊も傾尽し、甚困却ニ立到申候へ共、折角遙々此一事のため、故うに上京仕已ニ三年ニ垂々とする際ニ到迄脚を留メたる事ニ候へハ、何分御採用の有無承り不申候而ハ帰県難仕、因而至急御採用之有無御無沙汰被為在候様奉懇願候⁵¹⁾。

東京にやってきて約三年（つまり明治4年末頃上京）、ずっと建白「二十三題」のような課題を考え続けてきた自分に対する政府の返答がほしい、それがないと郷里・熊本へも帰れない、

というのである。すでにみたように、論旨をやや異にする建白「富国議」を前年に提出しており、一貫して同じ富国策を論じてきたのではなく、佐田の言には矛盾が含まれてはいる。とはいえ、明治3年末に排仏の風潮を実地で知り、翌4年末に東京へ出て以来の思考の総決算として「二十三題」を捉えているという意識もまた、含まれているといえるのではないだろうか。ならば「二十三題」は、「中人已上」「已下」あるいは「国恩」などは明言されていないものの、上のごとき「国家構想」とみてしかるべきである。

だが、この構想に対する左院の反応は、佐田が期待していたそれとは大きく異なっていた。左院が受領したのは1874年9月であったが、このころから左院の建白書処理のペースは急激に低下し、建白書を政府内の稟議に付する「上申」の件数も落ち込む一方であった⁵¹⁾。それゆえ佐田は三大臣にも返答を催促したのであるが、返答は結局12月末までずれこんだ。それは、「二十三題」は現状を正確にとらえた部分もあるが、おおよそ維新以前の旧制度に拘泥して「往々強詞以テ」異を唱えた論にすぎず、「左院留置」が適当である、との結論であった。つまり、「上申」もされなければ、佐田への返却もしないという、いわば「店ざらし」の憂き目にあったのである。

3 舶来品排斥への焦点化 —— 木戸宛建言・『栽培経済論』・「ランプ亡国の戒め」 ——

しかし佐田は熊本へ帰郷せず、東京にとどまり引き続き経済論を訴えた。今度は、左院ではなく政府要人のもとに直接に建言したのである。その相手は、参議木戸孝允であった。なぜ木戸に宛てたのかは、長州出身者と本願寺派僧侶（島地黙雷や大洲鉄然）の親しい関係など、いくつか推測が成り立つであろうが、佐田自身が幕末期に木戸と面会したという経験、これがひとつの重要な理由であることは間違いあるまい。

1875（明治8）年6月10日、佐田は木戸に宛て建言書をしたためた。この建言書でも先の「二十三題」と同じく、消費力向上を最優先にすべきという持論を開陳している。ところが、これには「二十三題」とは全く異なる意見を見いだすことができる。西洋からの輸入品を排斥するという方針に、一定の留保をつけているのである。

或人曰ク、外国ノ物品輸入ヲ禁シ、内ニ之ヲ用ヒザルヤウニ厳制スルニ如カス。石（佐田介石—注谷川）曰ク、未可也。ソノ所以ハ、今日スクマデ盛大ニ洋品ヲ入レ、百戸ノ商店八十戸マデ舶来品ヲ売り、千戸ニシテ八百戸マデ洋品ヲ売ル。今モシー時ニ頓ニ之ヲ止メハ天下ノ疲弊尚今日ノ上ニ更ニ百倍セン⁵²⁾。

要するに、今は急激に舶来品の門戸を閉ざすべきではない、というのである。もっとも、これにつづけて、外国製品の流入をくいとめねばますます害がひろがる、と述べているので、単

純に佐田の意見が急旋回したとは言えない。だが、従来描かれてきたような、徹底した舶来品排斥論者というイメージとは、およそかけ離れた口ぶりである。この建言書に対して木戸は、「拝謁ヲ許スニ地方会議畢ルヲ期トス」と返事した⁵³⁾。木戸は1875年6月20日に開会予定の地方官会議の議長をつとめることになっており、それが終われば面会しても構わない、ということであった。だが、7月17日の会議終了後も音沙汰がない。しびれをきらした佐田は、7月29日に面会を催促する書簡を送る。その文面は佐田のものとしては丁寧で、簡潔な内容であったが、ここでも注目すべき文言を残している。「二十三題」で強調した「皇国固有ノ開化」論が、揺らいでいるのである。佐田は、今まで日本経済のあり方に心を砕き、その方面の思考を鍛えてきたことを訴えかけたうえで、「長スルトコロハ、外国ト雖悉ク之ヲ取り、我皇国ト雖ソノ短ナルトコロハ悉ク之ヲ捨テ、毫モ愛憎ノ私ヲ以テ法ヲ枉ゲズ、タゞ目途ヲ実効ニ取り、実効アルモノハ巧拙美惡ヲ論セス之ヲ採」⁵⁴⁾る、と自分の立場と意気込みを強調する。この文言だけをとりあげれば、当時の西洋「受容」についてよく見られる「採長補短」の説であり、とりたてて珍しい論法というわけではない。だが、これは佐田の言葉である。あれほど西洋との相違を列挙し、強調していた人物の意見とは、にわかに信じがたい。

こうした言説の変容ぶりは、どう理解すべきだろうか。まず、「二十三題」が前年に黙殺され、自分の主張が政府にとどかなかったという経験を重視する考え方があるだろう。その主張が政府の意には沿わない、と重々承知した佐田が、自説の一部を変更したのだ、と。だがそれならば、なぜ佐田は自説を曲げてまで経済論を訴えるのか、という疑問も依然残る。筆者は、自説の「根幹」は曲げていなかったのであり、撤回したのは「枝葉」部分であった、そう解釈すべきだと考える。つまり、佐田が訴えたかったのはあくまで消費力向上の一点であり、「皇国固有ノ開化」などは変更可能な部分にすぎなかったのではないか。「二十三題」でも、民衆の消費力向上という太い幹からすれば、西洋品輸入の否定さえ、枝葉のひとつとして扱われていた（もちろん、佐田が個々の具体的な物品に注視していることは、のちの展開上萌芽としては重要であるが）。この木戸宛建言書でも、自説を曲げたというより、肝心の部分は変わらず訴えているとみるべきである。そしてそれを支えているのは、いうまでもなく消費を中心とした「国家構想」への関心であった。そのことは、1874年に政府へ提出されたと推測される建白書「御利益見込書」からもみてとれる。これは、共和政体・自主自由への警戒、あるいは貿易・経済政策の提言で、網羅的な「二十三題」とやや異なり、政府の基本的な心得を説いた建白書である。そこで佐田は、「方今西洋ト交通其美政ヲ取り行フニハ、先ツ上ノ財権ヲ惜マズ解放チ公共ノ物トスベシ」⁵⁵⁾と述べて、政府による経済活動の独占を戒める。そして、民間から財政担当者を抜擢するなどの方法を用いて、出費を抑制しがちな政府の財貨運用を改め、率先して消費をさかんにするよう主張する。しかも、そうすれば西洋の新制度や政策を採用しても人々が「上ヲ疑フコト」はない、と言い添えているのである⁵⁶⁾。つまり木戸への建言書と同じく、西洋の

政治・制度を拒むことよりも、まず自説の根幹たる消費力向上が採用されることが第一だ、という発想が明らかであろう。

さらに見ておきたいのは、佐田が「自己演出」にも神経を遣っていたという点である。消費力向上という主張を伝えるために、政府への建白や雑誌刊行という手段を自覚的にとっていくことはすでに述べた。だが佐田は、そこでの自らの意見が、どう読まれるべきなのかをアピールしてもいた。「御利益意見書」には、つぎのような文言がみえる。

言路開通忌諱ナキノ盛時少々ニテモ、耳ニ逆ヒ候言論ハ其言不可用モ、其逆フ処精々御賞揚無之テハ中以下ノ者皆粗暴ナラザレハ諂諛ト相成、議法御引立ノ実崩レ、人氣頹弛、百事苟且ト可相成候、且議論ハ切磋琢磨、事ノ至当ヲ求ル所以ニシテ何程妙論モ小疵ハ必有之、我ニ逆候論アレバこそ琢磨シテ純然無瑕ノ玉トナリ、然ル後施行スレバ後日取調候事ナキ様可相成候⁵⁷⁾。

今は言路洞開の世であり、少々耳障りな採用しがたい意見が出てきても、それは賞揚せねばならない。さもなくば「中以下」の人々が粗暴な行動に出るか、単に政府に盲従するだけである。反対意見を俎上にのせて議論を重ねることで、万全の方策ができる。佐田はこのように述べて、自分の意見は耳障りであっても、議論のさいに必要な「小疵」なのだ、と定位する。佐田には、自分の見解が一見役に立たない奇論だと思われる、という自覚は十分あった。だがそれをあえて「売り物」にしてゆくことが、自分の意見に耳を傾けさせる道であることも、了解していたのである。以上のように考えると、佐田がかなり戦略的に言説を変化させる人物であったことが見えてくるであろう。「枝葉」を加除するのは、訴える対象を意識してのことであり、消費力向上という「根幹」が、耳に届くように注意を払ったためであった。

さて、木戸宛建言のその後である。催促にもかかわらず、木戸からの返答は一向に来ず、結局面会は果たせずじまいであった。「二十三題」につづいて、政府要人からの反応は佐田にとり冷淡なものでしかなかった。このころから佐田は、前章でも触れたように、自説を訴える対象を政府以外に求めるようになってゆく。1875年2月、佐田は雑誌『世益新聞』を創刊する⁵⁸⁾。そこに以前建白書に記した内容の大略や、実際に提出した建白書をそのまま再録することで、持論を公表していった。木戸の「無視」についても、翌年新たに創刊した『掌珍新論』第1号（1876年10月）に上述の建言書と書簡を掲載している。政府へ直接ものを訴えるのでは埒があかない——佐田は、新たな方法を模索していったのである。

そしてその戦略性は、訴える対象を民衆へ転換し、演説活動に力を入れるようになった明治10年代に決定的に示される。佐田の経済論の集大成、1878（明治11）年5月末に初編刊行の『栽培経済論』⁵⁹⁾を検討してみよう。これは上下巻、30章からなり、翌年にはそれを敷衍した

後編も刊行されている。

『栽培経済論』における「富国」の方法は、後編第三章「富国道可必具三事論」での論述に集約されている。そこでは三つの方法、すなわち、国産品使用・舶来品不使用・消費力向上が挙げられており⁶⁰⁾、「二十三題」と同様である。木戸宛建言では、国産品愛用および舶来品排斥は「ゆらぎ」をみせていたのに対し、消費力向上という主張は「二十三題」→木戸宛建言→『栽培経済論』と一貫しており、佐田にとってそれが最優先課題であったことは疑い得ない。同書後編の扉に、「コノ書ノ趣意物品ノ製造ヲ後トシタゞ消費ヲ先トス。故ニ消費ノ法ニ於テ益アルハ悉ク之ヲ取り、タトヒ善業美術タリトモ消費ノ益ナキハ之ヲ取ラス」⁶¹⁾と述べられていることから、それは明らかである。

だが『栽培経済論』で注目されるのは、国産品愛用・舶来品排斥がふたたび強調されただけでなく、「消費」と同じく、欠くべからざる軸のひとつとなっていることである。後編第三章では、「三法鼎ノ三足ノ如ク一ヲモ欠グベカラズ。若シ一ヲモ欠ルトキハ富国ノ法立ツベカラス」と述べられている⁶²⁾。それまで「枝葉」であったのが、三本の幹として鼎立するものとしてとらえており、議論の力点がまた微妙に変化していることが読みとれるのである。それは、「舶来品」の範囲の変化としても表れる。佐田は、「舶来トイヘルハ西洋品ニ限ルニアラス。支那印度ノ品モ舶来品ナリ。而シテ支那品ノ輸入スルコト夥シ、防カスンハアルベカラズ」と注記している⁶³⁾。「舶来品」は西洋品のみならず、中国・インドの製品にまで広がっている。舶来品流入という事態を、より憂慮するようになっていたことがわかるであろう。また、この変化は別の意味でも重要である。それまで、佐田は仏教天文学や排耶論に内包される「対西洋」という基盤から自説を展開していた。それが木戸宛建言でゆらぎをみせ、『栽培経済論』に至って、日本／西洋ではなく、日本（産）／外国（産）を主たる観点とするようになったからである⁶⁴⁾。

佐田はこののち、民衆へむけて自説を訴えるとき、彼らの身近にある物品へと焦点をあててゆく。そして、「二十三題」では「枝葉」として各論的に列举されていた帽子、こうもり傘、ランプ、洋酒などが、以後の佐田の著述では、次々と前景に現れることとなる。それを象徴する著述が、1880（明治13）年7月16日と18日に『東京日日新聞』に掲載された投書「ランプ亡国の戒め」であった。これには、「富国」という直接の文言はみられない。従来の「幹」であった消費力向上の重要性も述べられず、もっぱら舶来品排斥へ論が絞られているのである。投書の中では、ランプが引きおこす大害として、ランプ輸入による金貨流出、行灯・ろうそく・種油など約160品目の産業の壊滅、国内石油の枯渇、それにともないわずかに石油が採取できた新潟・長野での破産続出、そして火災の頻発が挙げられ、最後に「何ゆへに世人この畏るべきを早く止めざるぞ。各々争ふて国の斃るゝを待つに似たり」と結ばれている。もはや、「愛国」心の涵養や「国恩」、「富国」を云々されることはなかった。「富国」のために消費力向

上を唱え、またそのための舶来品排斥であったのが、この投書ではただ害毒を強調するのみであった。

以上、本章で述べたことをまとめておく。排仏の風潮にじかにふれた佐田は、仏教者として国家および社会への参与を意識する。明治5年の教化テキスト執筆を契機に、人々の「愛国」心涵養のために採るべき施策を建白書で要求するようになる。そこで消費による「国民」統合構想が打ち出される。舶来品排斥はその一環ではあるが、代替可能な一つ的手段にすぎなかった。しかし明治10年代に訴える対象を民衆へと転換し、演説という直接的教化を行うようになる。民衆の実践方針としての舶来品排斥へ力点を置く。そして、とりわけ身近な舶来の物品（とりわけランプ）についての議論を前面にだしてゆく。その過程は必ずしも一直線ではなかったし、それは他方で、佐田の思想的基盤である仏教天文学の「対西洋」という視点が、後景に退いてゆく過程でもあったといえるであろう。

第三章 舶来品排斥論の〈共有〉

1 舶来品の浸透

ここでひとつの問題が浮上する。佐田はいかなる状況判断のもとに、舶来品排斥論を民衆へ提起していったのか。つまり、自己の言説が社会に支持されうると考えたのか、ならばそれはなぜなのか。『東京日日新聞』への投書が入選したことも、社会的支持への自信を深める一つの転機であったといえよう。だがより重要なのは、舶来品が排斥を訴えねばならぬほどに人々の暮らしに浸透していたのか、そして舶来品排斥がまともに受けとめられるような思潮が存在しえたのか、である。

前者については、周知のとおり、1881（明治14）年まで、明治前期の日本の貿易収支は一貫して輸入超過であった。そして、佐田が排斥すべきものとして挙げる舶来品は、明治10年代前半においてすでに一定の資産家・上層自作農にも十分入手可能なものであった。経済史の中西聡は、都市近郊および開港場周辺地域では、資産家のみならず自作農層も、インフレを背景とした現金収入の上昇などにより砂糖、ランプ、石油、蝙蝠傘など単価の安い舶来の品物を購入しはじめていたことを明らかにしている⁶⁵⁾。

そして、ランプの不始末による火災が頻発している、という状況認識も広がっていた。1880年、東京で発生した火災のうち、ランプによる失火は437件中20件で、「放火の疑い」（208件）を除けば藁灰（46件）、かまど（24件）に次ぐ第3位であった。たしかに、決して圧倒的な数字というわけではなかった。だが同じ照明具の「行灯及灯明」による火災が、1877～1881（明治10～14）年の5年間で40件であったのに対して、ランプ火災は同じ5年間で倍以上の98件も発生しており⁶⁶⁾、新たな火災原因として無視できない存在であったと思われる。「ラン

「亡国の戒め」が『東京日日新聞』に掲載された次の日（同年7月17日付）の同紙にも、東京・三田の牛鍋屋で発生したランプ火災の記事が載ったばかりであった。

佐田がランプや石油などの個々の舶来品を論じるようになったのは、明治10年代前半における自作農の購買力上昇と、それに伴う消費生活の変化に沿ったものとも言えよう。ただし、それが同時に、消費者に舶来品の便利さが認識されてゆく過程でもあることは注意せねばならない。つまり、この時期にはもちろん排斥論が高まりうる状況であったものの、逆にそれを固陋な考え方として退ける風潮もまた広まってゆくと予想されよう。佐田の主張は、微妙な位置にあったのである。

2 知識人との〈共有〉——自愛社の存在——

いま一度、冒頭にあげた『東京日日新聞』の懸賞論題に戻ろう。この問いが発せられたのは、当時その解決方法がさまざまに想定されていたからにはほかならない。そして舶来品排斥という佐田の議論が二等入選を果たしたのは、その議論が決して単に奇妙な発想とだけ受けとめられたのではなかったことを示す。

それは、当時の「知識人」たちの動向をみても、理解できる。ここではまず福沢諭吉を挙げよう。佐田が『栽培経済論 初編』を上梓したのと同じ1878（明治11）年に、福沢は『通俗国権論 初篇』を刊行している。その第六章「国を富ます事」のなかで、こう述べている。

外国の製造品を入るゝのみにして、我国天然産の物を出すときは、我国民は製作に由て得べき利益を失ふのみならず、ついには製作の術をも忘るゝに至る可し。譬へば金巾唐綾メリンスの類を輸入して之を用るときは、日本人は機織の利益を失ふのみならず、遂には其手に覚たたる芸をも忘れて、末代まで職業を失うに至る可ければ、是等の輸入品には別段に税を掛るとか何とか、制限を付ること緊要なり⁶⁷⁾。

舶来品を全く拒絶するわけではないにせよ、輸入に制限をつけるべきだと論じるのである。また、手技製作の技術喪失という予測を述べる点で、佐田が「欽上 富国議」「二十三題」で述べた見解と共通することが見いだせよう。そして福沢は、「苟も身の為を思ふて国の利を謀らんとする輩は、内外の品を較べて孰れを用るも眼前に損徳なきもの之は、内国品を取る様にしたきことなり」⁶⁸⁾とつづけている。要するに、国産品使用を「通俗」、すなわち「民間婦女子」に要求しているのである。

このように、佐田の論じる舶来品排除の方向性は、同時期の福沢と重なり合う部分を多く有していたが、もちろんひとり福沢のみではない。まずその広がり示唆するものとして、『栽培経済論』の序文を書いた人々の存在をみておきたい。同書の初編では、井上毅（執筆当時太

政官大書記官）、重野安繹（太政官一等編修官）、栗本鋤雲（『郵便報知新聞』主筆）、中村正直（東京高等女子師範学校摂理）の四名が序文を寄せている。また同書後編（1879（明治12）年9月刊行）では、柳原前光（元老院幹事）、桜井能監（内務省社寺局長）が執筆している。若手ながら有力な官僚や、著名な知識人が名を連ねていることがわかるだろう。もちろん、序文はその書物に「箔をつける」という意味合いも強く、序文を書いたからといって、そのまま本文筆者との濃いつながりを示すとはいえない。だが、まったく必然性のない人々が依頼されるとも考えにくい。たとえば『郵便報知新聞』では、1878年5月9日に早くも栗本鋤雲の同書序文が掲載されている（中村正直の序文も同6月3日に）。刊行前にもかかわらず序文を発表したのは、同新聞主筆たる栗本が単に依頼に応じただけでなく、『栽培経済論』を積極的に評価するが故のことであるとみてよいだろう⁶⁹⁾。

そして井上毅も、ただの「箔つけ」で依頼され寄稿したというわけではなかった。井上の場合、佐田と同郷・熊本出身であることもさることながら、舶来品排斥という考えも自身の見解と重なっていた。それを端的に示すのが、井上らが結成した「舶来品排斥結社」の存在である。これについては、福沢『通俗国権論』にも少し触れられている。

近日、社友矢野文雄君及び其他諸有志者の発起にて、自家に用る舶来品を全く廃する歟、又は之に限りをつけんとて、一社中を結ばんとせり。其趣意も蓋し爰『通俗国権論』一注谷川に論ずるものに異ならざる可し⁷⁰⁾。

福沢らが設立した都市民権結社・交詢社の社員であった矢野文雄（龍溪）らが中心となって、舶来品排斥（ないし制限）を主張する結社が、1878年の段階で作られようとしていたのである。矢野の伝記には、より詳しく記述されている。

先生〔矢野－注谷川〕はまた、或時には一の産業運動もやつた。日本の産業が頗る幼稚であるがために舶来の輸入品が多く、貿易は連年輸入超過が続き、夥しく正貨が流出するといふ心細い有様であつたので、先生は井上毅や、小野梓や、三好退蔵等と協議を重ねて、なるべく輸入を防止し、国民をして出来るだけ内地の製品を用ひさせる一大運動を起すべく、一の協会を組織しようとした。その宣言は先生の筆に成つたものである。然るに上記の会員は、先生の外は皆在朝の壮年若手の官員であつたから……井上等は岩倉右府から内諭を受けた結果（内実は某国公使から岩倉に苦情が出たので）効果を挙げるに至らなかつた⁷¹⁾。

この伝記は昭和前期に弟子筋に当たる人物が著したものであり、確証とはいえないが、重要な証言である。メンバーの足並みがそろわず効果をあげるに至らなかった、とされているもの

の、実際に結社が存在したことが予想されよう。そのメンバーの中に、井上毅の名前がみえる。井上は、外国公使の苦情を受けた右大臣岩倉具視の干渉によって運動から手を引いたというが、その経緯は不明である。さらに、『明教新誌』1880（明治13）年2月14日付の論説「報国の志あらん者は外国輸入品を用ふべからず」には、「曾て同志結合して一社を盟立し名て自愛社といふ（内閣大書記官井上毅。太政官少書記官小野梓。大蔵少書記官矢野文雄。本社〔明教社〕々長大内青巒等その発起人たり）社中堅く約て苟くも外国輸入に係るものは一品も之を用ふることなし」とある。前の史料とあわせて読むと、井上毅・小野梓・矢野文雄という面々が重なっており、同じ結社についての言及と考えられる。とすれば、彼らに加え三好退蔵・大内青巒といった人々を中心として、舶来品を一切用いず国産品愛用を実践および鼓吹する結社・「自愛社」が存在したことがはっきりする。また、1878年7月13日付の『読売新聞』にも自愛社について記事が載っている。そこではメンバーとして上記に加えて江木高遠（東京大学予備門教員）、岸田吟香（元『東京日日新聞』記者）、中村正直、前島密（内務少輔）、神田孝平（文部少輔）らが名を連ね、一昨日（同年7月11日）に東京・日吉の共存同衆館にて会合がもたれた、と報じられている。翌1879年にも活動しているようで、小野梓の日記の同年2月20日条、23日条にも会合を開催した旨記されている⁷²⁾。残念ながら、自愛社の具体的な活動内容を知ることはできないが、とにかく政府の有力官僚や在野の知識人が舶来品排斥という方針のもとに糾合したことを、まず重視せねばなるまい。

では、佐田はこの自愛社とどのようなかかわりをもっていたのであろうか。それを示すのが、1880年5月27日に長野県・上田警察署へ提出した答弁書である。佐田は1880年5月、コレラ予防の演説のため長野を訪れ、長野の善光寺を皮切りに、飯山、中野、小布施、須坂、松代、上田などの町を巡回している。そのうち同5月25日に別所村・安楽寺（現小県郡塩田）で演説を行った際、政府の推奨する舶来の石炭酸による予防法や、一概に清潔にせよという説諭方法に対して疑問を呈した。それが政府への誹謗に当たるとして、上田署に拘引され二週間ほど取り調べをうけることになったのである。その際の答弁書で、佐田は次のように述べた。

宮内ノ大輔万里小路通房、内務ノ大^{〔大輔〕}丞前島密、内閣ノ大書記官井上毅、大蔵ノ少書記官矢野文雄、正院ノ少書記官小野梓、元老院ノ議官神田孝平等斥洋社（洋品ヲ斥ケル社ナリ）トイヘル一昨年社ヲ設ケ、尚又当年ソノ社名ヲ自愛社ト改メ舶来品ヲ用ヒサル結社ニ相成リ、専ラ輸入品ヲ減スルコトニ尽力ニ及ハル、⁷³⁾

佐田の見解では、1878年に出来た結社の名称は最初「斥洋社」で、1880年になって自愛社と改めた、というのである。すでに見たとおり、自愛社の名は1878年に新聞紙上でも出ているので、佐田の言は正確ではない。だが、この「不正確」は重要である。なぜなら、佐田が自

愛社には参加していなかったことを示唆しているからである。それは同時に、佐田が直接関与しないところで舶来品排斥論が広く共有されていることを物語っている。もっとも、上に挙げた面々と接する機会も、少なからずあったようである。井上毅、中村正直らに『栽培経済論』序文の執筆を依頼している以外にも、たとえば1880年2月には、三田演説会において「経済論」（14日）、「富国三法」（28日）という論題で演壇に立っている⁷⁴⁾。いずれにせよ、佐田は自らの説が受容されうる状況にあると了解していたのである。

以上より、『栽培経済論』を刊行した1878年前後において、舶来品排斥という方向性自体は、福沢や井上毅をはじめとする官僚や知識人、ジャーナリストのあいだで幅広く存在していたことがわかる。してみれば、彼らとの思想的交差や「すれ違い」、そして当時の財政指導者である井上馨や大隈重信の見解との比較検討が、つぎに深めるべき論点になると思われるが、それは別に稿を用意せねばなるまい。だが少なくとも、佐田が舶来品排斥を精力的に説いて回った点だけをもって、「奇人」とは言えないことは理解できるであろう。

第四章 演説と結社

1 演説の実相 —— 新聞・雑誌記事より ——

本章では、佐田の演説、および結社の実相を探ってみたい。聴衆による直接的な証言が乏しいので、新聞や雑誌の記事群を集積して、おおまかな様子を析出する方法をとることにする。

佐田の演説に関する記事は、管見の限りでは、1878年3月17日、東京浅草・伝法院で行われたのを報じた『明教新誌』が最初である。この演説は19日まで3日間連続で行われ、初日には小石川・伝通院、上野・寛永寺の貫主をはじめ、高橋泥舟や三遊亭円朝らがその門弟を引き連れて来るなど、聴衆は会場いっぱい集まった。そこで行われたのは、前年に再度製作した視実等象儀の展覧と解説であった⁷⁵⁾。

これ以後、佐田は各地へおもむき演説活動を展開してゆく。【表3】には、大新聞および仏教系新聞の記事を中心に、演説の実施状況を示した。まず開催地であるが、主として東京、京都、大阪で、前章に挙げた【図3】で見たように、消費の中心地・三都を重要視していることがわかる。東京を起点にいくども京阪へ足を運び、その経路である東海道沿いの各地や、群馬、千葉、長野でも実施している。ほとんどの場合、佐田がひとりで演説したようである。会場は、支持者の商店舗・自宅や、三田演説館、小学校、女子手芸学校などのケースもあるが、最も多いのは寺院であった。目下判明する分では、大方が宗派立学校を含めた寺院での開催であった。また1880（明治13）年11月28日正午から大阪・西区の千代崎学校で行われた演説では、聴聞希望者に対して傍聴牌、すなわち整理札が、近隣の世話人宅で配られていたという⁷⁶⁾。

もっとも、【表3】で挙げた実施状況は、実際の回数よりかなり少ないと思われる。1881年

人 文 学 報

【表3】 佐田の演説開催 — 新聞・雑誌記事より — (1)

年	日付	開催地	会場	内容	備考	出典
11年	3月17～19日	東京・浅草	伝法院（天台宗大教支院）	視実等象儀講演	高橋泥舟・三遊亭円朝ら門人連れ来場	明教 11.3.20 付
	5月17～19日	東京・浅草	浅草寺内天台宗大教院	視実等象儀用い「地不動説」		朝野 11.5.9 付
	5月 〔5～8月〕	東京 神奈川	曹洞宗専門本校 本覚寺	仏教天文学 キリスト教（新・旧とも）を痛罵	西有穆山の招請 聴衆約2,000名、鈴木・目黒某ら3名の妨害（未遂）	浅野 p.57 略伝 10 丁表
	6月12日	神奈川・伊勢山		天文	師範学校生徒が地球平面説に疑義、返答に窮す	朝野 11.6.22 付
	6月21～23日	東京・両国	高野山出張所	視実等象儀の縦覧および講演		明教 11.6.6 付
	6月24～26日	東京	真言宗大教院	視実等象儀の縦覧および講演		明教 11.6.6 付
	6月			立世阿毘曇論、日月行品、老子二千年限	曹洞宗専門校助教師の招請（西有穆山か）	明教 11.6.24 付
	8月3日	千葉	曹洞宗中教院	等象儀展覧・講演	同県の大八宗派の合議（日蓮宗は不同意）	明教 11.7.18, 7.24 付
	8月 9月18日頃 ～11月	諸府県 東海道近辺各府県 （東京～京阪、長野など）		天文・経済	巡回 巡回	浅野 p.57 伸知録 p.4, 明教 11.12.12 付, 朝野 12.3.28 付
12年	5月〔中旬〕	愛知・名古屋			のち大垣、岐阜を経て京阪へ。聴衆は「夥しく参集」	報知 12.5.21 付
	11月15日 12月10～14日	群馬・前橋 東京・浅草	伝法院（天台宗大教支院）		3日間 伝法院の招請	伸知録 p.43 明教 12.12.10 付
13年	2月1～5日	東京・茅場町	福田会育児院		三遊亭円朝の演説と同時間開催	読売 13.1.27 付
	2月14日 2月28日	東京・三田 東京・三田	三田演説館 三田演説館	「経済論」 「富国三法」	第145回三田演説会 第146回三田演説会。中上川彦次郎「富国一法アルノミ」演説の予定も抹消	三田演説日記第2号 三田演説日記第2号
	2月29日 ～3月2日	埼玉・蕨	旧区務所	仏教説法および天文経済の演説	西福寺徒弟白石成心の招請	明教 13.2.24 付
	4月	長野・佐久			天台・真言・浄土・曹洞有志の招請	伸知録 p.0
	5月～6月	長野	善光寺(5日間)、飯山忠恩寺、中野法運寺、飯田玄照寺、須坂浄念寺、松代長明寺、塩崎天用寺、上田芳泉寺・大輪寺、別所安楽寺等		飯田は小布施の誤りか。聴衆は一回の演説で34,000～数万	明教 13.7.10 付, 伸知録 p.43
	5月22～25日	長野・小県郡		経済、天動説、「虎列刺病ノ事」		伸知録 p.38
	5月24日	長野・小県郡上田町	大輪寺	「栽培経済論」 「富国強兵」	大輪寺荒井超元、別所村安楽寺若林祥麟の招請	伸知録 p.13
	5月25日	長野・小県郡別所村	安楽寺	「経済論」および「虎列刺予防説論」	「政体誹謗」の廉で上田署に拘引（～6月9日）	伸知録 p.0,25,28, 朝野 13.6.6 付, 明教 13.7.10 付
	6月11日 6月13日 7月1日	長野・小県郡別所村 長野・臼田村 東京・浅草	安楽寺 弥勒寺 伝法院（天台宗大教支院）		貞祥寺鈴木正光の招請	伸知録 p.49 伸知録 p.50 明教 13.7.8 付
	8月1～11日	京都	真宗大谷派上等普通教校	「立世阿毘曇論」 「日月行品」	聴衆は250～260名。渥美契縁・細川千蔵も出席	開導 13.8.10,26 付
	8月〔下旬〕	京都	真宗大谷派上等普通教校	須弥山説、「十八疑問」	上等普通教校生徒有志10名余の招請	開導 13.8.26 付
	10～11月頃	京都		「天動地静」説・栽培経済論		大朝 13.11.14 付
	11月13～17日	大阪	西天王寺			大朝 13.11.14 付

〈奇人〉佐田介石の近代（谷川）

【表3】 佐田の演説開催 — 新聞・雑誌記事より — (2)

年	日付	開催地	会場	内容	備考	出典
	11月18日 ～12月17日	大阪・天王寺	東光院	「天経惑問日月行 品」		大朝 13. 11. 20 付
	11月20日	大阪・北堀江	小島善五郎宅	天動・地動説	前大阪府学務課長日柳 政憲と討論	大日 13. 11. 20 付
	11月28日	大阪・北堀江	千代崎学校	「栽培経済論」	竹中視一、武田武助両 名の招請	大朝 13. 11. 27 付
	11月29日	大阪・北堀江	女子手芸学校			大朝 13. 11. 27 付
	11月頃	滋賀・彦根		経済論		彦根市史下 p. 154
	12月10～11日	大阪・三津寺町	大福院	天動説・経済論な ど		大朝 13. 12. 7 付、 大日 13. 12. 8 付
14年	1月15～19日	東京・浅草	伝法院	観光社開設・輸入 批判の講演	500人余が観光社入 社、奏任官以上・教正 が数十人	東日 14. 1. 17 付、 明教 14. 1. 12 付、 両教 14. 1. 20 付
	1月末頃	京都	妙心寺		大教正関無学の招請	両教 14. 1. 25 付
	1月〔未か〕	京都	真宗大谷派普通教校	天文		大朝 13. 11. 19 付
	3月6日	東京・浅草	井生村楼	観光社演説・舶来 品排斥論		明教 14. 3. 2、 6 付
	3月下旬	大阪				両教 14. 3. 26 付
	3月〔未か〕	京都			大阪から 来着、六益社結成に向 け入社者募集	両教 14. 3. 6 付
	5月6日	京都			本願寺派の招請	法教 14. 5. 16 付
	5月14日	京都	真宗本願寺派旧總 会所	天文		法教 14. 5. 16 付
	5月25日	京都・浄勝寺一条	智恵光院		聴衆、場内に入りきらず	法教 14. 5. 26 付
	5月29日	京都・浄福寺一条	浄福寺（浄土宗）			法教 14. 6. 1 付
	6月1～3日	京都・高倉五条	宗仙寺	経済・天文	聴衆「夥しき群集」	開導 14. 6. 13 付
	6月4日	京都・寺町	大雲院		「例の通りにて満堂」	法教 14. 6. 11 付
	6月9～10日	京都・七条	遊行寺			法教 14. 6. 16 付
	6月11日	兵庫・尼崎、大阪			尼崎の土族堀小三郎の 招請	法教 14. 6. 21 付
	6月13日	京都・寺町	浄案寺		呉服商 10 名の招請	法教 14. 6. 21 付
	6月14～15日	京都・大宮寺ノ内	超勝寺		西陣織物商の招請	法教 14. 6. 21 付
	6月16～17日	京都・東中筋花屋町	西六条仏教社			法教 14. 6. 21 付
	6月18日	京都	下村大丸本店			法教 14. 6. 21 付
	6月19～20日	京都・寺町鞍馬口	大寧寺			法教 14. 6. 21 付
	6月21～22日	京都	本國寺内日蓮宗中 教院			法教 14. 6. 21 付
	6月23～24日	京都・東福寺	東福寺本坊			法教 14. 6. 21 付
	6月25日	京都・四条烏丸			長刀鉾町の招請	法教 14. 6. 21 付
	6月下旬～7月	京都・寺町	本能寺	外国品排斥		朝野 14. 7. 7 付
	7月20日	京都・南禅寺	金地院	外国品排斥論・キ リスト教駁撃	洋学生 5、6 名に詰め 寄られるが無事	開導 14. 8. 1 付
	9月9日	愛知・名古屋	大丸屋	外国品排斥	大丸屋の招請。しかし 集会条例抵触の嫌で解 散命令	東日 14. 9. 15 付
	10月7～8日	三重・津寺町	西来寺			法教 14. 10. 11 付、 伊勢 14. 10. 7 付
	10月9～10日	三重・津寺町	天然寺			法教 14. 10. 11 付、 伊勢 14. 10. 7 付
	10月11日	三重・津茶屋町	四天王寺			伊勢 14. 10. 12、 13 付
15年	1月22日	東京・両国	中村楼		曳尾社開業式挙行。前 座に神原精二、出辺南 竜、三遊亭円朝、村上誠 らの「排洋護国の説」	問答新誌 5、 明教 15. 1. 18 付
	3月	群馬			桐生・足利・高崎に観 光分社設置	略伝 12 丁裏
	6月9～11日	大阪	法善寺	「例の話」		大朝 15. 6. 11 付
	6月〔中旬〕	京都・六角町	伊藤次郎兵衛方	経済論		開導 15. 6. 19 付
	10月	長野県中南部			筑摩など四郡巡回、報 国社設置	略伝 12 丁裏、 浅野 p. 58
	11月26～28日	長野・飯山				略伝 14 丁裏

※「年」は明治。「出典」の項、明教…『明教新聞』、開導…『開導新聞』、大朝…『大阪朝日新聞』、大日…『大坂日報』、東日…『東京日日新聞』、両教…『両教雑誌』、法教…『法教雑誌』、朝野…『朝野新聞』、伊勢…『伊勢新聞』、読売…『読売新聞』、問答…『栽培経済問答新誌』、浅野…浅野前掲書、をそれぞれ略。

5月下旬から6月にかけて、佐田は京都でほぼ毎日演説を行っているが、その典拠となる記録は『法教雑誌』という新聞（月6回刊行）の報道である。これは西本願寺派の系列（法教社）新聞であり、自宗派を中心に、仏教関係記事を中心に載せている。したがって佐田の、ことに京都で行われている演説の情報は、他の新聞よりも刻々把握して報じている可能性が高いのである。また、『東京日日新聞』1882年3月29日付では、「目今は神田区内ニ毎夜二ヶ所位ゐかけ持ニ歩行、例の舶来品用ゆべからずの説を懇ろニ訓さる」とあるように、一晩のうちに二か所で開催する場合もあり、佐田の実際の演説頻度ははるかに高いことが予想される。大新聞や仏教系の新聞以外に、地方紙まで目配りすれば、より正確な実施状況が明らかになると思われるが⁷⁷⁾、【表3】はそこまで至っておらず、だいたいの傾向を示すにとどまっている。

つぎに聴衆であるが、新聞記事を完全に集積したとしても、聴衆の階層などを特定することは、なかなか困難と思われる。というのも、聴衆人数や著名な人物の来聴が報じられることもまれで、たいていの記事は「聴聞人夥しく参集する」⁷⁸⁾と触れるだけである。もちろん、演説の実施方法などに着目すれば、ある程度の推測もできるかもしれない。佐田の演説は、支持者の招請をうけて行われる場合が少なくない。その招請者は、大半が僧侶であった。よって、聴衆は彼らの檀家がひとつの中心をなしていた、といってよいだろう。だが、その宗派などは特定できない。1878（明治11）年8月に千葉県で実施された演説の場合、同県曹洞宗中教院の招きで行われたが、これは県内の天台・真言・浄土・臨済・曹洞・日蓮宗妙満寺派の各宗寺院の決議によるものであった（評議には真宗・時宗も参加⁷⁹⁾）。さきに触れた、1880年5月に長野で行ったコレラ予防演説も、天台・真言・浄土・曹洞四宗僧侶有志の依頼をうけて出向いているし⁸⁰⁾、東京でも各宗の寺院で演説を行っている。何々宗の檀家が主たる聴衆であった、というような全体的傾向を析出することは難しいのである。しかも佐田自身、1879年末ごろに真宗本願寺派から天台宗へと転宗してもいる⁸¹⁾。むしろ、宗派にこだわらず有志の招きにに応じて赴いた点こそみるべきであろう。

演説内容に目をうつすと、やはり天文論と舶来品排斥を中心とした経済論が圧倒的に多いことがわかる。1880年12月10日の大阪・三津寺町大福院における演説開催について、『大坂日報』は「又々例の得意の天動説経済説杯を説教さるゝよし」と報知している（同12月8日付）。はじめに紹介した1882年1月13日付『東京日日新聞』の「例の輸入品防遏説」といった表現は、実は各紙でひんばんに登場しているのである⁸²⁾。会場による内容の偏りは特にはみられないが、1880年4～6月のコレラ予防演説は長野のほかにはなく、特殊な例といえる。ただ、そこでも話題はコレラにとどまらず、舶来品排斥へと移っていったようである。更級郡網掛村・大井常吉なる人物は、商売の年間収益500円のうち100円を舶来品の購入に充てるという家則を立てていたが、佐田の演説に接すると一転してそれを改めた⁸³⁾。つまり、コレラ予防演説を聴きにきたつもりが、いつのまにか内容が経済論に変わっていったのである。この事例だ

けで、演説の内容はすべて舶来品排斥へと収斂していく、と単純に把握することは慎まねばならないが、建白書の叙述様式にみられるように、佐田の議論は話題が中心から外れて別の課題、ことに演説では舶来品排斥へ転じてゆく傾向があったのではないだろうか。

2 結社の形成 —— 三都の場合 ——

こうした演説の結果、「はじめに」でも述べたような、舶来品排斥論を支持する結社が各地に形成されていった。【表4】に挙げた各結社の創設には、たいていの場合佐田自身が深く関与していた。佐田は演説先で地元の支持者たちと協議し、結社の命名や、結成に際しての趣意書・運営の基本的規則などの作成を、中心となって行ったのである。本庄栄治郎はこうした結社について、「演説を聴いて感動した者が、その場で直ちに舶来品排斥に賛成したという程度のものであり」、会則を作り会員を糾合して強固な団結をなしたというものではなかった、と

【表4】 佐田を支持する結社（『明教新誌』『栽培経済問答新誌』『朝野新聞』『大阪毎日新聞』『伸知録』『略伝』『彦根市史 下巻』より作成）

年代	場所	結社	介石	結社の動き
13年5月下旬	長野北部	憂国社	○	寺院 700 ～ 800
13年7月頃	長野県更級郡	佐田社	×	長野県更級郡網掛村の大井常吉が同志を募集
13年10月頃	金沢	爱国社	×	『栽培経済論』に触発された舶来品不用論者たち
13年11月中旬頃	大阪	保国社	○	難波月江院の岡大愚らが尽力。「愛国有志の輩」入社相次ぐ
13年12月末	彦根	報国社	×	佐田の演説に影響うけた商人結成
13年秋～冬	滋賀県蒲生郡	共憂社	○	
〃	滋賀県滋賀郡	護国社	○	
〃	滋賀県坂田郡・浅井郡	博済社	○	
〃	岐阜	済急社	○	
〃	愛知	輔国社	○	
〃	三重	魁益社	○	
〃	尼崎・徳島・岩国・島根	保国分社	△	
14年1月	東京	観光社	○	浅田宗伯、大内青巒へ相談。桜井能監、福田行誠、新居日薩、唯我韶舜、釈雲照、黒田清綱、矢野文雄、小野梓ら入社
14年6月下旬頃	京都	六益社	○	六波羅蜜寺玉井豊如ら。呉服商下村大丸、六益社入社を乞い、そのうえ出入りの者 850 名にも佐田の説を強く勧奨
14年11月中	福知山・宮津・綾部・与謝郡	六益分社	△	玉井豊如の巡回
15年1月上旬頃	益田	里仁社	×	
15年1月	東京	曳尾社	○	
15年3月	桐生・足利・高崎	観光分社	○	群馬県下よりの招請を受けて、同県を巡回
15年10月頃	長野中南部	報国社	○	筑摩郡など 4 郡を巡回
16年4月頃	新潟	富国本社	△	

※「介石」の項は、佐田の関与により設立したものを○、その結社が設立したものを△、関与していないものを×とした。

述べているが⁸⁴⁾、その評価の根拠は明らかではない。いずれにせよ、支持者の広がりを考える場合、結社の存在は注目に値するであろう。それらの活動の様子を、三都に出来た結社を事例にみてみよう。

三都のうち最初に結成されたのは、「はじめに」でも挙げた、大阪の保国社である。保国社は、佐田が大阪へ演説にやってきた1880（明治13）年秋、11月中旬に結成されている。結成に当たっては、佐田の支持者である難波・月江院（曹洞宗）住職の岡大愚の尽力によるところが大きかったという⁸⁵⁾。岡らの周旋もあって支持者が結集され、尼崎、徳島、島根、岩国といった遠方にも、同年末までに分社が結成されていった⁸⁶⁾。佐田は翌年春に京都で連日演説していたが、6月11日には大阪へ足を運び、尼崎の分社とともに巡察している⁸⁷⁾。こうした巡察を佐田自身が行うことによって、保国社はしだいに組織をかためていったようである。1881（明治14）年5月現在で、社員数はじつに54,625名にのぼった。このころ、社員のうち特別有志者80名を選出、彼らを構成員として会議を開き、社則・永続方法を議決したほか、大阪府下に80か所の分社をおき、演説者を巡回させる方針も立てたという⁸⁸⁾。また保国社では、結成時に結社の趣意書である「同盟帳緒言」を作成している。そこでは、日本の総人口約3,800万人が一人当たり毎日2厘7毛ずつ舶来品を消費するとすれば、日本の正貨3,800万円が海外へ流出してしまう、と警告したあとで、こう述べている。

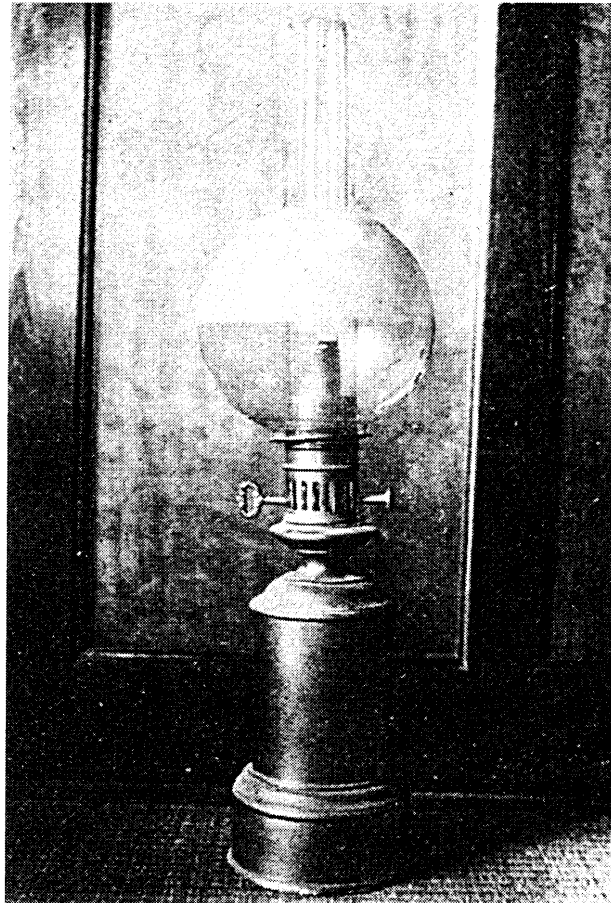
如此金貨の外国へ濫りに出る、たゞ一年限りのことにあらず。年々際限なく我日本の利潤を失ふに至りては、安ぞ我国の金貨尽ざらんや。然るに金貨はこれ国の魂なり。魂抜け去らば安ぞ国の命亡びざらんや……今日の困窮は、これ困窮の初めにて、真の困窮は今日より始る故に、終にこの困窮の極るや、放火盜賊縦横に興り、切り取り窃盗いたすもの道路に充滿、強きもの恣に暴行し、弱きものは山野に倒れ臥し、終に盗み取るべき品物尽き、而して後各々殺害を行ひ、互に人の肉を割き噉ふ程の憂目を見る世の中に至る……その原因一として舶来品の所為ならざるはなし⁸⁹⁾。

今日は舶来品のせいで「国の魂」が抜かれた状態であり、やがて放火や窃盗、殺人など真の困窮を招くことになる。そこで諸悪の根源である舶来品をうちすて、ことごとく日本品にせよ、という実践がうたわれるのである。おそらく演説でも、佐田はこのような恐怖心をあおる文言を織り交ぜて、舶来品の排斥を訴えたのであろう。

ついで1881（明治14）年1月、佐田は東京に観光社を結成し、同15日から19日にかけて、浅草・伝法院にて結成記念の演説を行った。大阪や滋賀では結社が次々と結成されているのに、東京では未だ結社もなく人びとは「因循困難」の状態にある、そういった思いから、佐田が漢方医浅田宗伯や大内青巒らと協力して結成したものであった⁹⁰⁾。この観光社には新居日薩、福

田行誠、釈雲照らの高名な僧侶が入社した。そして、桜井能監、矢野文雄、小野梓らも社員として名を連ねた⁹¹⁾。彼らは前章で見たとおり、『栽培経済論』の序文寄稿者および自愛社の中心メンバーであり、佐田の考えに共鳴する人びとであった。自愛社が結成された1878年から3年が経過しても、依然として著名な官僚・知識人のあいだで佐田と意見を共有する者は存在していたのである。ちょうど結成のころ、佐田は小野梓邸を訪問して直接会っているが⁹²⁾、これも観光社についての意見交換であったかもしれない。さらに1882年3月には、群馬でも高崎・桐生・足利の三か所に分社が結成された⁹³⁾。

さて、観光社の活動としては、他の結社同じく舶来品排斥を実践してゆくとともに、その一環である代用品の生産・販売が重要であった⁹⁴⁾。なかでも代表的なのは、ランプの代用品として、佐田が河野龍溪なる人物とともに発明した「観光灯」である。これは舶来品である石油のかわりに種油を用いた照明器具であるが、【図4】をみるとわかるように、ランプを模したも



【図4】 観光灯（家庭用）（『社会経済史学』第9巻第2号，1939より）

のであった。『栽培経済問答新誌』（1881年12月創刊）に数号にわたって掲載された「日本製国益品広告」では、正貨流出を防ぐ点、石油より明るい点、石油の光線は目に害がある点などが列挙されており、大・中・小、上・中・下⁹⁵⁾と種類も取り揃え販売していたようである⁹⁶⁾。佐田はすでに前年から、その生産には着手していた。1880（明治13）年7月13日には、滞在先の京都から『栽培経済問答新誌』の編集長であった清水純崎⁹⁷⁾に宛てて書簡を送っている。そこには、「新發明之種油相用ひて之ランプ」を10個ばかり東京へ送り、それをとくに有志の者へ折々披露するよう手配しておいた、と述べられている⁹⁸⁾。この新發明のランプが、観光灯にあたると考えられる。先ほどの「国益品広告」にも「観光灯製造の時、聊かぶりきを用ひたれども、これハ全く職工の失策なれハ、諸君請ふ、深く咎むること勿れ、其後製造に係るものハ毫もぶりきを用ひ不申候」⁹⁹⁾と添書きがあるので、おそらく最初は舶来のブリキを用いたものであったのを、その後東京で有志の声をとりいれて改良をほどこしたものと合わせて、観光社を起点に大いに売り出そうとしたものと思われる。

もうひとつ、1881（明治14）年6月頃には京都で六益社が結成された。京都では、前年にも聖光寺神阿・大原寺園辺によって、大阪保国社のごとき結社の設立が企図されたが、資金の都合で断念していた。だが翌年1月には、大阪保国社の岡大愚や京都の玉樹遊樂らがふたたび結社結成に動き出した¹⁰⁰⁾。そして、春に京都へやって来た佐田と連携して結成したのが六益社であった。その資金の面では、地元の古い豪商たちの支援によって克服したようで、とくに呉服商大丸の下村惣太郎は、出入りの者ら約850名とともに入社したという¹⁰¹⁾。六益社には、結成した直後からこのような入社希望者が殺到し、同年8月にはすでに社員は5万を数えた¹⁰²⁾。また、六波羅密寺住職・玉井豊如ら中心的な社員は、京都の市中で舶来品排斥演説を行ったほか¹⁰³⁾、京都府下の郡部を巡回して演説を行い、その先で分社を結成している。さらに、観光社同様、国産のランプ・蝙蝠傘といった代用品発明も手がけている。三条通東洞院の太物商・日下部某を窓口として、舶来品を用いている地域へ代用品を輸送し、説諭の上交換するという運動も行っていた¹⁰⁴⁾。

以上三つの結社の事例から、佐田が民衆へ接近するひとつのすがたが見えてくる。それは、自説を多くの見知らぬ人びとに訴える演説家というよりも、自分の支持者を結社に囲い込み、確保するために出張するという、オルガナイザーとしてのすがたである。その過程で（とくに明治13年以降の）佐田は、支持者のなかに身を置くことが必然的に多くなってゆき、いっそう彼らの実践活動にかかわる部分に関心を注ぐことになっていったと考えられる。それが、具体的な物品への焦点化であった。代用品の発明・販売も、その文脈から出てきた活動ともいえるだろう。第二章で明らかにした、『栽培経済論』から「ランプ亡国の戒め」への変化は、まさにこうした支持者との接近が大きな要因となって生じたものであった。

そして、代用品の発明は、ある意味で舶来品の「受容」にほかならない。国産品であろうと、

ランプや蝙蝠傘を生産することは、佐田自身がそれらの便利さを無意識のうちに認めていたためであった。それを端的に示すエピソードがある。1881年7月1日、佐田は演説のため大阪から京都へ向かった。ところが急いでいたためか、こともあろうに鉄道に乗って入浴してしまう。その夜本能寺で行われた演説において、下京の舶来品問屋の手代から、汽車か人力車か船か、どのような手段で京都に来たのかと問われた。佐田はそこで汽車を用いたと正直に答えたのである。すると手代は「成程如何ニも汽車は便利ですナァ」と語りかけ、それにも「左様」と返してしまった。その後は手代がこそことばかりに舶来品の利点を堂々と述べ、佐田は完全にやりこめられる格好となり、黙り込んだというのである¹⁰⁵⁾。舶来品排斥を訴えるために、「舶来品の鉄塊」を利用してしまったこの事件は、佐田の軌跡がただ「西洋化」を拒む過程であったわけではないことを、如実に物語っている。舶来のランプから行灯へ回帰するのではなく、まさにランプを受容するひとつの「西洋化」の過程にあったのである。

3 佐田「受容」の諸相 —— 金沢・彦根・益田の結社をめぐって ——

これら佐田が直接関与した結社以外にも、佐田の影響を受けて成立した結社も少なからず存在した。そうした結社は、単に佐田の支持者の広がりを物語るだけでなく、佐田の舶来品排斥論が人びとにどう受容・消化されたのかについて、示唆を与えてくれる。

『大阪朝日新聞』によると、1880（明治13）年10月頃に石川県・金沢では、有志者の協議によって結社・愛国社が設立され、舶来品を用いない活動方針が立てられようとしていた。そこで定められつつある規則のなかでは、輸出入の不均衡による正貨流出がわが国財政の疲弊の根源であり、それを解決するにはこれ以上理論を重ねても遅い、各自がなすだけ国産品を用いるという実践こそが必要だ、との認識が示されているという。このことを新聞社に報知してきた人物は、制作途中の規則の内容を知っているので、おそらく愛国社内部の者であると推測される。その人物は、「夫等の項目は彼佐田介石氏が著述せられし栽培経済論と云ふ書籍に就て、其の趣意を玩味し玉はゞ自ら富国強兵の基るともならん」という意見を述べていた¹⁰⁶⁾。つまり、『栽培経済論』に学び、舶来品排斥・国産品愛用の実践が「富国強兵」につながるとの見解をもっていた人物が、金沢愛国社に参加していたことになる。この愛国社においては、佐田の総論的著作が、舶来品排斥という実践のもととなる理論を提供していた。逆にいうなら、佐田が示した「富国」構想が、実践方法とともに受容されていたことを示しているであろう。

だが、こうした佐田の構想の「すなおな」受容とは異なる事例もみえる。1880（明治13）年冬、佐田は滋賀県・彦根で演説を行った。その直後、演説に共感した彦根の商人たちを中心に、結社・報国社が設立された¹⁰⁷⁾。活動の眼目はもちろん舶来品排斥にあったが、その規約には興味深い項目が立てられた。舶来品を五種類に区別し、それぞれに排斥の度合いを分けることを提唱したのである。

《第1種》 断然購求不可。既に買った物も売却または破棄。

(洋酒, 洋食, 洋装, 懐中時計, 帽子, 蝙蝠傘, 靴, 西洋紙など 18 品目)

《第2種》 新調不可。既に買った物はしばらく使用可。

(客席用台ランプ, 褒賞品用ガラス類, 舶来製金物, 掛時計, 寒暖計など 10 品目)

《第3種》 「中等以上ノ者」は断然排斥, 日本製の絹・麻・木綿等織物を充用。「下等ノ者ニシテ一家多人数」の場合は舶来品でもやむを得ず可。

(金巾木綿, 羅紗など 4 品目)

《第4種》 しばらくは使用可。精々注意して自国品購求すべき。

(洋糸混じりの日本製織物, 中国産砂糖を用いた日本製菓子)

《第5種》 不可欠ゆえ使用可。舶来製購求不可, かわりに自国製の代用品使用。

(ランプ, 石炭油, 商店に用いるガラスなど 4 品目) ※ただし石油は別¹⁰⁸⁾。

そして, 結社に 12 年の年限を定め, その存続は 12 年後あらためて考える, としたのである。たしかに, 大阪保国社の「同盟帳緒言」においても, 「当分の内, 従前在り来りの洋品を用ひると, 或は即今改むるとの両様は, 各自の適宜たるべき事」という但し書きが末尾に添えられてはいる¹⁰⁹⁾。だが, 報国社規則のような段階的实践という方法は, どの著作にも出てこない。

報国社の舶来品排斥は, 佐田の著作にあらわれた構想からはみでる形で行われたといえるであろう。「富国」という構想を云々するよりも, まず目前の問題としてある社員の実践を具体的に示すことが, 報国社にとっては重要事であった。彼らは佐田の影響を, 理論的背景や構想から受けたというよりも, かけ声や実践の次元で受容したという側面が色濃いのである。それは佐田の側からいえば, 演説内容自体を変化させてゆき, 聴衆の期待する個別具体的なことから論を焦点化していったことを示す。演説した直後にこのような結社ができるのは, まさに佐田の演説が具体的な排斥実践に焦点を絞っていたからであって, 報国社の規則はそれを忠実に反映しているのだ, という説明も成り立つであろう。

また, 1882 年初頭, 島根県の益田において設立された結社・里仁社を紹介する『朝野新聞』の記事も, 佐田が著作から遊離して受容されていることを示している。

石州美濃郡益田本郷ニて近来有志者が結合して里仁社といふを設立し, 入社するもの日増ニ多しとのことなるが, 矢張り佐田介石翁の主義を遵奉したるものか, 節儉を主とし飽まで舶来品を摺斥し, 且つ宗旨の信仰ハ各自の随意たるべしといへども神仏の外ハ信仰すべからずとの盟約なりといふ¹¹⁰⁾。

島根には, 前述のとおり京都六益社の分社はできていたものの, 県西部の益田にまで佐田が直接演説に赴いたという記録はない。しかし, 金沢(愛国社)と同様に佐田が訪れていない土

地でも舶来品排斥結社がつくられており、その結社が佐田の「主義を遵奉」したものと見なされていることがわかる。佐田の影響がやはり全国的なものであったことを示す記事といえるが、重要なのは、いかなる「主義を遵奉」したのかを述べた後半部分である。

おそらく記事の書き手は、里仁社の舶来品排斥とキリスト教信仰禁止という項目をとらえて、これは佐田介石の考えだ、とその影響力を認識しているようである。だが、ことはそう単純ではない。第二章でみたように、佐田は「二十三題」のなかで「節儉」の必要性を強調していたが、そこでは消費活動の抑制ではなく、分相応な消費を行えという意味に力点を置いていた。ところがこの記事での「節儉」は、舶来品をあくまで買わないという実践と結びついており、単に消費を抑える方向でのみ用いられている。したがって、この結社は佐田の影響を全く受けていない可能性もあり、記者の勇み足にすぎない、という見方も可能ではある。だが逆にいえば、人びとの佐田「受容」は、消費抑制・舶来品排斥・キリスト教排除という主張にあらわれる、とする見方が広く存在していたとも考えられるのではないだろうか。人々にまとまった構想や眼目を正確に理解されたからというより、さまざまに「曲解」される余地があったことにこそ、佐田が「時の人」となった理由を見るべきであろう。

いずれにせよ、演説を精力的に行い、結社が成立してゆくにつれて、佐田は国内消費力向上による「富国」構想から遊離するようなかたちで、あるいは実践面を重視されるかたちで、受容されていったのである。

以上、演説の実態、および結社について述べてきた。1878年以降、佐田の演説は三都をはじめ各地で支持者を生んでいった。支持者たちは結社をつくったが、それには佐田自身が関与する場合も多く、いわば彼らの「囲い込み」を行っていった。それは決して、佐田の持論であった消費による「中人以上／以下」の「国民」統合構想が、各地に広まるという過程ではなかった。むしろ、支持者たちはもっぱら具体的な舶来品排斥実践に関心を寄せた。彦根の事例に明らかなように、人びとは佐田の演説を柔軟にうけとめ、自分たちの都合にひきつけ受容したのである。

本稿では、佐田の「戦略性」を強調してきた。しかし、身近な物品への注目や具体的実践から、ふたたび根幹にある構想の理解へ人びとを導く、という戦略まで立てていたのだろうか。その点は、大いに疑問がある。たしかに明治ゼロ年代、自説が容れられないうちは、その再検討や戦略的な工夫も行ってきた。だが皮肉にも、明治10年代以降、演説によって人びとに受容されるようになると、そうした戦略性は影をひそめていく。演壇から熱っぽく自説を訴えかけ、聴衆から熱狂的な支持を得るにつれ、それを自己目的化していった。それが、佐田の最晩年におけるすがたであった¹¹¹⁾。

お わ り に

周知のとおり、1882（明治15）年、日本の貿易収支は出超に転じ、また松方デフレによる紙幣整理により、農村を中心に国内消費力は急激に低下する。自説の論拠となる状況が変化し、舶来品排斥論の説得力が失われつつあるなかで、佐田は死ぬ間際まで支持者を組織するため演説に奔走し、同年12月9日、出張先の上越高田で65歳の生涯を終える。

佐田という人物を、いかに把握すべきだろうか。本稿で描いた佐田のすがたは、僧侶・仏教天文学者として培った素地が、経済論を訴えるさいにどう反映されてゆくか、という視点からとらえることができる。佐田は仏教天文学の研究によって、他の僧侶以上に包括的な「対西洋」意識をもつことになった。経済論へと視野を広げたのも、その素地ゆえであった。しかし経済論者としての佐田は、舶来品排斥論を展開させてゆくにつれて、単なる西洋への反発にとどまらない変容（「舶来品」の範囲拡大、代用品という「西洋」受容）を示してゆく。それは同時に、培ったもうひとつの素地——いかに説得的に自説を訴えるかという、その戦略的意識が、消費を軸とした「国民」統合構想からランプ排斥実践へと、自説を矮小化させてゆく過程でもあった。

もちろん、佐田を通じて明治初期の諸相をかいま見る、という視点から位置づけることも可能であろう。第三章で述べた舶来品排斥論の広がり以外に、主張を世に訴える伝達手段が複合化してゆくという様相が見いだせる。すなわち、個人建白が大きな位置を占めた明治ゼロ年代から、演説・新聞・雑誌・結社・連名建白・学塾などを駆使する時代を迎える10年代へという変化は、佐田の行動に典型的に示されているのである。こうした「新しい政治文化」の形成は民権運動の文脈で指摘されてきたが¹¹²⁾、佐田は民権運動と直接関わりのない人物であり、当時の風潮としてより広く理解することができよう。

また、近代仏教の方向性という問題を考えるときにも、浮かび上がることがらがある。明治初年の仏教者は、社会における仏教「無用」視の顕在化に直面して、その克服という課題に取り組むことになる。佐田の行動は、明治10年代におけるその取り組みがいかなるものだったかを示唆している。この時期は、大教院を中心とする神仏合同教化という方針が崩れ、仏教各宗が独自に教院制をしいて組織強化を図り、近代教団として自立してゆく過渡期としてとらえられる¹¹³⁾。だが、各地の僧侶たちは、宗派を越えて佐田に演説を依頼した。佐田もそれに応え、さまざまな宗派の僧侶に招かれ、教理説教に天文学や舶来品排斥論を結びつけ演説した。これは、彼らが宗派単位で組織される客体であるだけでなく、上記の課題克服の方法を主体的に模索していたことを物語っている。そして、佐田のような宗派にとらわれない行動は、既成教団に対するひとつの批判のあり方としても把握できる。その点では、清沢満之の精神主義運

動をはじめとする、日清戦後の多様な仏教者の意識・動向も視野におさめつつ言説を位置づけるべきであろう。

佐田をのちの時代につながる存在として位置づける場合、先行研究では、明治20年代のナショナリズム勃興、具体的には政教社¹¹⁴⁾や鳥尾小弥太、谷干城ら¹¹⁵⁾との連関などが示唆されてきた。しかし佐田は、おそらくそれにとどまらない、明治初期の社会のありように対して多様な見方を喚起する存在であると思われる。大濱徹也は、明治10年代を「日本の民衆が非常に流動的な状況のなかで、さまざまなところに組織されていていっているときであった」と述べている。それは農談会の組織化、キリスト教会や仏教系教会・講社の増加などにみられるが、そうした「組織化の時代」を象徴する存在として、佐田の演説活動を意義づけている¹¹⁶⁾。きわめて重要な把握である。

最後に、佐田に付されてきた「奇人」という言葉がもつ意味について、述べておきたい。森鉄三は、天保期に「寛政三奇人」（高山彦九郎・林子平・蒲生君平）の呼称が成立しており、幕末には「奇人」の語は〈奇勝なる人〉、つまり他と異なりすぐれた人という意味で把握されていたと述べる¹¹⁷⁾。また、佐田と親交の厚かった福田行誠は、「肥後の人なり豪邁学を好む、等象儀を造る、著書数部あり、国事のために志を尽す、一奇人なり」と評している¹¹⁸⁾。一方で、佐田を批判する側の文言として、1882年7月に発表された論説「佐田介石和尚能ク聴ケ」では、佐田を「北向キナル者」「変物」「奇物」という語を用いて批判している¹¹⁹⁾。つまり、少なくとも佐田が死ぬ1882年前後まで、「奇」という言葉は〈すぐれた、殊勝な〉という意味でも、今日よく使われる〈異様な、珍妙な〉の意味でも用いられていたのである。それを後世の者が吟味せず、「変人」的な意味合いをこめた見方を踏襲し、イメージが増幅していったために、「佐田＝奇人」というレッテルにつながったのだといえるかもしれない。もっとも、それを安易に研究者の責にのみ帰してしまうのは慎まねばならない。第二章でも指摘したように、佐田自身が〈珍妙な〉存在と目されるよう「自己演出」した側面もあるのだから。佐田にとって「奇人」というレッテルは、迷惑なものでもあり、「望むところ」でもある、というべきかもしれない。

本稿は経済論と行動の「変化」を中心に、佐田像を描こうとしたものである。もとより考察を深めるべき個所は多々残っており、散漫な試論の域を出ていない。ただ、微妙に揺れ動き随所に矛盾を示すその言説や行動は、「結局〇〇な存在だった」と位置づけられることを拒むかのようにも見える。そこで本稿ではあえて、佐田をより広い歴史的文脈のなかに厳密に位置づける作業をせず¹²⁰⁾、今後の研究のおおまかな論点を示すにとどめた。だが少なくとも、「奇人」というショウケースにとじこめておいては見えなかった、佐田のそうした動態を照射することはできたのではないかと思う。

註

- 1) 佐田の寄稿文は『東京日日新聞』1877(明治10)年8月10～14, 16～18日付に掲載。
- 2) 同前, 1877年8月10日付。
- 3) 奇峰樵者「佐田介石師」(「明治畸人伝」『文芸倶楽部』定期増刊号(第12巻第6号), 1906, pp. 140～141)。
- 4) 内田魯庵「獏の舌」(『内田魯庵全集』補巻2, ゆまに書房, 1987) p. 26。原典は『読売新聞』1920年6月4日付。
- 5) この記事について, 「七万余人」という文言を演説聴衆の延べ人数とみて, 誇張しすぎている, と断じてはならないだろう。吟味すべき箇所が二つある。第一に, 「昨今」がいつなのか。佐田はこの1881(明治14)年末から翌年1月には東京で雑誌『栽培経済問答新誌』の創刊に取り組んでいるので, 大阪にいるとは考えられない。だが1881年3月末から8月ごろに京都・大阪を演説して廻ったという記録が残っており, それが時期的に最も近い。よって「昨年来」ととるべきであろう。とはいえ, 京都での演説が大半であったため, 「七万余人」という数字を「昨今」の演説の聴衆動員数と見るのは, 無理がある。一方, 後に述べるように, 佐田を支持する結社・保国社が1880年11月に作られており, 翌年5月には5万名を超える社員を擁していた。この記事までの半年あまりの間に, 社員が「七万余人」にまで増加したというならば, 決してこの数字は誇張とはいえないのではないか。つまり, 1881年半ばに大阪で演説した結果, なお佐田の支持者が増えつづけているという状況こそ読み取るべきなのである。
- 6) その牽引車のひとつとなったのは, 明治文化研究会であった。その代表的人物のひとり, 吉野作造は「佐田介石著述目録並解題」を発表している(『国家学会雑誌』第43巻第11号, 1929, pp. 87～117)。また木村泰賢「佐田介石氏の視実等象論(一)」(『新旧時代』第3年度1月号, 1927)にも, 「本誌が明治文化史の一材料として佐田介石氏の関する事共を記載するといふので, 私には視実等象儀に就て書くやう吉野博士からの注文である」という記述があり(pp. 52～53), 吉野作造を拠点として佐田研究に火がついていったことがうかがえる。
- 7) 浅野による佐田の研究論文は数多い。「明治初年の舶来品排撃運動」(『無尽通信』第10巻第2・3・5号, 1933)を皮切りに, 翌年には『明治初年の愛国僧佐田介石』(東方書院, 1934)を刊行している。これを一つの到達点として, 以後も補遺的なエッセイの発表, 史料紹介を精力的に行っている。浅野は同書のなかで, 「佐田介石全集」を近く刊行する予定であると述べており(p. 55), 書翰などの一次史料の集積につとめていたようであるが, 結局全集の刊行は実現することなく終わった。
- 8) 浅野前掲『明治初年の愛国僧佐田介石』pp. 1～2。
- 9) 本庄栄治郎「佐田介石の研究」(『日本経済思想史研究』増補版下, 日本評論社, 1966, pp. 265～314。初版は1942)。
- 10) 衣笠安喜「開化期の伝統主義者たち」(林屋辰三郎編『文明開化の研究』岩波書店, 1979), 大濱徹也「反耶蘇教運動とリバイバル」(大濱『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館, 第2章第2節, 1979), 柏原祐泉「佐田介石の仏教経済論——近代における封建仏教の倒錯——」(『仏教史学研究』第27巻第1号, 1984), 牧原憲夫「徴兵制か士族兵制か」(牧原『明治七年の大論争』日本経済評論社, 第2章, 1990), 奥武則「開化と迷蒙のはざままで——佐田介石のこと」(奥『文明開化と民衆』新評論, 1993)。
- 11) 柏原祐泉は, 明治初年の言説を分析し, その変化に注視しているほぼ唯一の論者であり, その点は高く評価したい。だが柏原は, 佐田に封建仏教からの脱皮の萌芽と, その挫折をみてい

るが、挫折の要因を佐田の「奇人」性に求めている（柏原前掲「佐田介石の仏教経済論」pp. 19-20）。この点では、「奇人」のレッテルを相対化するような再解釈とはほど遠いといわざるを得ない。

- 12) 『明治建白書集成』第3巻, p. 925。
- 13) 1877（明治10）年9月24日付の『読売新聞』には「浅草森下町の桃林寺に寄留の佐田介石といふ人」とあり、『栽培経済論』奥付にも「東京浅草森下町五十五番地桃林寺同居」と記されている（『明治文化全集』第15巻思想篇, 日本評論社, 1929, p. 308）。
- 14) 長野憂国社編『伸知録』非売品, p. 12。
- 15) 『明教新誌』1880年7月20日付「寄書」欄。
- 16) 『助字櫟』巻8奥付。また、同書末尾には、『実字櫟』を上中下各4巻、『虚字櫟』を全30巻で「追刻」として付記されている。
- 17) 浅野研真「佐田介石の建白に就て」（『明治文化研究』第3輯, 1934）, p. 104。
- 18) 浅野研真「佐田介石建白集（一）」（『伝記』第2巻10号, 1935, p. 143）。
- 19) ただし、明治3年執筆と推測される、「竊試」と題した長文の意見書が横浜市立大学附属図書館に残されている。これは「本邦最後の梵暦家」とされる僧侶・工藤康海の旧蔵書で（同図書館編『梵暦蒐書目録』1969, 参照）、管見の限り同図書館にのみ現存する。内容は、維新政府の政策に対して「定則」「封建郡県」「兵制」「楮幣」「耶蘇」など11項目について提言を行ったものである。その冒頭に、「肥後国飽田郡小島村 等象斎介石」の名で上表文が書かれているが、実際に政府へ送付したかどうかは不明である。
- 20) 『明治建白書集成』第4巻, p. 437。
- 21) 同前, p. 441。
- 22) 佐田の天文論について簡潔にまとめたものとしては、木村泰賢「佐田介石氏の視実等象論」（『宗教研究』新第1巻第2号, 1925）参照。
- 23) 日本における地動説の導入については、渡辺敏夫『近世日本天文学史（上）』（恒星社厚生閣, 1986）pp. 265-285, を参照。
- 24) 岡田正彦「忘れられた「仏教天文学」— 梵暦運動と「近代」—」（『宗教と社会』第7号, 2001）pp. 72-79。
- 25) 本書は、竜谷大学大宮図書館に写本で残っている。『鎚地球説略』を批判する勝閑道人著『護法新論』を入手した門人島村七五三八が、佐田に同書の記述について問いかけ、佐田が逐一反駁してゆくという形式で叙述されている。よって、少なくとも『護法新論』が刊行された慶応3（1867）年のあとに書かれたことがわかる。
- 26) 本書は、横浜市立大学附属図書館に、注19)で触れた工藤康海が筆写した写本として残っている（1936（昭和11）年11月19日に筆写済）。
- 27) 「明治九年 島根県歴史 政治部」（『府県史料』国立公文書館所蔵、本稿では雄松堂マイクロフィルム版参照）明治9年8月18日条。この口達のきっかけとなったのは、1876（明治8）年11月の、京都・勤修寺住職釈雲照らによる島根県巡回説教であった。雲照は、同県下での説教のさい、フランス人L・C・ボンヌが著した『泰西勸善訓蒙』（箕作麟祥訳）の内容を非難した。この本は当時全国の小学校で口授科などの教科書として広く用いられていた。雲照にとって、キリスト教の天主を奉じる「敬天」を説く同書が子どもに教え込まれている状況は、由々しき事態と思われたのである。そして、同書には地動説も紹介されており、それについても須弥山説を堅持する立場から否定的な態度を示した。島根県庁はこの点を問題視し、雲照を県政、こ

とに学校教育を妨げる存在とみて糾弾し、最終的には説教差し止めという命令を下すに至った（翌年3月）。これをうけて、教部省は須弥山説教禁止令を口達したのである。この過程については「明治九年 島根県歴史 政治部」、および『明教新誌』第276-282号、1876年4月26日～5月8日付。

- 28) 『朝野新聞』1878年6月22日付。
- 29) 『七一雑報』1880年10月29日付。
- 30) 『大坂日報』1880年11月20日付。
- 31) 岡田前掲「忘れられた「仏教天文学」」pp. 75-79。
- 32) ただし『世益新聞』第9号（1876年8月）には、すでに「ランプの戒め」と題した論説がある。その論旨にはのちの「ランプ亡国の戒め」と大きな変化はないが、本稿では佐田の経済論全体において主軸となる構想をトレースすることに眼目を置いており、1876年当時にはまだランプなど個々の物品は前景に押し出されてはいない、と把握しているので、「枝葉」部分として一旦捨象したい。むしろ、1880年になってから、わざわざあらためて新聞に投書するという行動をこそ重視すべきと考える。
- 33) 『龍谷大学三百五十年史』史料編第2巻、1989、pp. 656-657。
- 34) この政策については多角的な研究がすすめられている。最近のものとして、谷川穰「教部省教化政策の転回と挫折—「教育と宗教の分離」を中心として—」（『史林』第83巻第6号、2000）、小川原正道「大教院の一考察」（『日本歴史』第640号、2001）などがある。
- 35) 現存する説教用テキストの存在については、河野省三「明治初年の教化運動」（『国学院大学紀要』第1号、1932）、大林正昭「教導職によってなされた公民教育について」（『広島大学教育学部紀要』第1部、第32号、1985）などで明らかにされている。
- 36) 『明治仏教思想資料集成』第2巻、同朋舎出版、1980、p. 284。
- 37) 同前、pp. 284-285。
- 38) 『明治建白書集成』第2巻、pp. 375-377。
- 39) 同前、p. 376。
- 40) 同前、p. 377。
- 41) 『明治建白書集成』第3巻、pp. 922-977。
- 42) 順に、文明開化、改暦、洋席、断髪、服制、学問、和洋婚姻、養獣、備米、立礼、富国強兵ノ次序（以上上巻）、煉化石、鉄道、造幣寮、楮幣、自主自由、租税、開墾山林（以上中巻）、旧藩士進退、人材登庸、兵制、富国方法、城市存亡（以上下巻）。同前 p. 925。
- 43) 牧原前掲「徴兵制か士族兵制か」p. 67。
- 44) 『明治建白書集成』第3巻、p. 947。
- 45) 内田前掲「獺の舌」p. 36。
- 46) 『明治建白書集成』第3巻、p. 931。
- 47) 同前、p. 923。
- 48) 同前、pp. 962-963。
- 49) 「二十三題」の序文には、「皇帝陛下ノ親覽ヲ経テ聖断ヲ乞ヒ奉ラント欲ス」と言い添えられている。同前、p. 924。
- 50) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料』8、鹿児島県歴史資料センター黎明館、1995、p. 79。
- 51) 牧原前掲書『明治七年の大論争』pp. 173-181 参照。
- 52) 『明治仏教思想資料集成』第4巻、1980、p. 408。

- 53) 同前, p. 412。
- 54) 同前, pp. 412 - 413。
- 55) 前掲『玉里島津家史料』8, p. 110。
- 56) 同前。
- 57) 同前, p. 108。
- 58) 浅野研真は、『『世益新聞』の初めの諸号に於ける論文の執筆者名は種々あるが、すべては介石の筆になるものと云つて良からう』（浅野前掲書, p. 13）と述べているが、真偽のほどは確かではない。だが、主たる論説がのちに佐田の著作に転載されていることから、佐田の文章が多いとは言えるだろう。ちなみに、のちに東洋社会党を設立した樽井藤吉も、この『世益新聞』発行に携わっている。
- 59) 『明治文化全集』第15巻, 日本評論社, 1929, pp. 309 - 410。
- 60) 同前, p. 357。
- 61) 同前, p. 353。
- 62) 同前, p. 357。
- 63) 同前。
- 64) 佐田の中国に対する見方を示すものとして、1874（明治7）年9月の建白「清国不可討之議」が挙げられる。これは台湾出兵と、それに端を発し清国との戦争へ発展する事態を非とする論で、大義を失すること、日本国内が疲弊し混乱していること、そして小国たる日本が大国たる清国には結局勝てないことなどを、縷々述べている。だが、清国への敬意らしきものはそこには見出せない（『明治建白書集成』第3巻, pp. 876 - 881）。
- 65) 中西聡「文明開化と民衆生活」（『日本経済史1 幕末維新时期』東京大学出版会, 2000）pp. 237 - 271。
- 66) 以上の統計は、1883年11月刊「内務省統計書」上巻の「東京府下火災ノ原由」より（大日方純夫・勝田政治・我部政男編『内務省年報・報告書』別巻1, 三一書房, 1984, pp. 77 - 80）。
- 67) 福沢諭吉『通俗国権論 初篇』（『福沢諭吉全集』第4巻, 岩波書店, 1959）, p. 632。
- 68) 同前, p. 633。
- 69) 『郵便報知新聞』において『栽培経済論 初編』刊行が報じられた記事をみると、消費力向上を優先せよという主張を「実に未発の奇論であります」と評している（1878年5月31日付）。
- 70) 福沢『通俗国権論 初篇』, p. 633。
- 71) 小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』大阪毎日新聞社, 1930, p. 120。
- 72) 『小野梓全集』第5巻, 早稲田大学出版部, 1982, p. 336。また同3月15日条にも、「中村〔敬宇〕・三好〔退蔵〕と会し、終に井上毅を訪ふ。自愛社のことを談ぜんが為め也」とある（同 p. 336）。
- 73) 1880（明治13）5月27日, 上田警察署宛。長野憂国社前掲『伸知録』p. 3。
- 74) 『三田演説日記』第2号（松崎欣一『三田演説会資料』慶応通信, 1991, p. 143）。なお、14・28両日は「聴衆満堂」であったと特記されており、とくに14日は佐田の熱弁が過ぎたためであろうか、次に予定されていた福沢の演説が時間の都合上中止になったという。
- 75) 『明教新誌』1878年3月20日付。
- 76) 『大阪朝日新聞』1880年11月27日付。
- 77) たとえば、1881年10月の『伊勢新聞』では、同月7日から10日にかけて「大講義佐田介石説教」が行われるという広告を掲載し（7～9日付）、13日付の紙面には小学校の休校と佐田

の演説開催とのかかわりを示唆する記事が出ている。

- 78) 『郵便報知新聞』1879年5月21日付。
- 79) 『明教新誌』1878年7月24日付。
- 80) 『伸知録』序文。
- 81) 『略伝』10丁裏, および『明教新誌』1880年2月4日付。
- 82) 『大阪朝日新聞』1882年6月11日付の記事に至っては、「彼佐田介石師ハ此程再び来坂せられ一昨九日より法善寺に於て例の説を講ぜらる」とあり、人びとにとってもはや佐田の話の内容は周知のこととなっていたのである。
- 83) 『伸知録』p. 44。こののちも大井の舶来品排斥への関心は高まったようで、同年夏ごろには、結社を結成すべく同志を募った。結社の名は、ずばり「佐田社」であった。『明教新誌』1880年8月2日付。
- 84) 本庄栄治郎前掲論文, p. 306。
- 85) 『大阪朝日新聞』1880年12月5日付, および『明教新誌』1880年11月22日付。
- 86) 『明教新誌』1881年1月10日付。
- 87) 『法教雑誌』1881年6月21日付。
- 88) 『明教新誌』1881年6月16日付。
- 89) 本庄栄治郎「佐田介石の舶来品排斥の思想と運動」(『経済論叢』27巻5号, 1928) pp. 161 - 162。
- 90) 『明教新誌』1881年1月10日付, および同12日付。
- 91) 『明教新誌』1881年1月12日付, および『両教雑誌』1881年3月26日付。
- 92) 『小野梓全集』第5巻, p. 346, 1881年1月24日条。また, 同1月29日には佐田書簡を受け取り, 返事を書いている(同p. 346)。
- 93) 『略伝』12丁裏。
- 94) 観光灯以外に, シャボン, レモン, 蝙蝠傘の代用品としてそれぞれ「都ターあらひ粉」「名物みかん糖」「観光傘」などが作られたようである。代用品の発明については, 浅野前掲書, pp. 34 - 37。
- 95) 1881年12月上旬ごろ, 観光灯は東京府より発売免許を取得する。値段は上等12円, 中等6円, 下等2円50銭であった。『開導新聞』1881年12月19日付。
- 96) 『栽培経済問答新誌』第17号, 1882, 扉広告。
- 97) 清水純崎(疇太郎)は元幕臣で, 人足寄場奉行もつとめた(小川恭一編『寛政譜以降旗本家百科事典』第3巻, 東洋書林, 1997, p. 1371)。その任務にあった慶応2(1866)年, 清水は寄場南端に常夜灯を築いている。これは寄場で絞りとった種油での収益金を充当した灯台であった。佐田との出会いや交流のほどは詳らかではないが, こうした行動が佐田と気脈を通じる糸口であったことは確かであろう。
- 98) 浅野前掲書, 扉写真。
- 99) 同注96)。
- 100) 『両教雑誌』1881年1月10日付。
- 101) 『大阪朝日新聞』1881年7月8日付。もっとも大丸の場合, 佐田が出向いて演説したいと申し入れたところ謝絶されたという記事もある(『大阪新報』1881年6月21日付, 本庄前掲論文p. 310)。真偽のほどはともかく, 必ずしも全員が納得して入社したというわけではなかったと思われる。

- 102) 『明教新誌』1881年8月20日付。
- 103) 玉井は1881年10月17日に長寺町・勝円寺にて舶来品排斥演説を行っている。それを報じた『開導新聞』では、佐田にも劣らぬ達弁である、と評されている（同年10月29日付）。
- 104) 『開導新聞』1881年9月9日付。
- 105) 『朝野新聞』1881年7月7日付。
- 106) 『大阪朝日新聞』1880年10月20日付。
- 107) 『彦根市史』下巻，1987，pp.153－154。
- 108) 同前，pp.154－157。
- 109) 本庄栄治郎「佐田介石の舶来品排斥の思想と運動」（『経済論叢』27巻5号，1928）p.161。
- 110) 『朝野新聞』1882年1月20日付。
- 111) 最晩年の佐田を照らし出すもうひとつの視角として、門人養成について述べておきたい。1878年7月ごろ、佐田の門人によって私塾・枕流社が設立されている。これは仏教天文学と経論を講義する仏教塾で、諸人の入社を許可し、月謝を寄宿生2円、通学生25銭と定めていた（『明教新誌』1878年7月18日付）。ただ、この枕流社に対する佐田の関わりかたや、具体的な門人養成のありようも、明らかではない。この時点ですでに門人が存在することを確認しうるのである。その後、1882年8月には、『略伝』の著者仁藤巨寛や成田固頑（この名！）ら門人たちが協議し、佐田に学林の設立を進言したうえ、その学林の教頭就任をも要請した。佐田が教頭になれば、当然単に仏教の専門的な教理を授けることにとどまらず、佐田自身の考え方を生徒たちに説くことになるであろう。仁藤らの意図はそこにあり、思想の継承を期待しての要請であったと思われる。だが佐田は、演説で忙しいことを理由にそれを断わり、かわりに上野寒松院（曹洞宗）住職・多田孝泉を推薦する（『明教新誌』1883年12月4日付）。同じころ、佐田は前年末創刊の通信講座的な雑誌『栽培経済問答新誌』を休刊した。佐田はこれを「筆教」と位置づけていたが、その「問答」に対する熱意を失っていたのである。最晩年の佐田は、問答をもって自説をねばり強く理解させ、発展・継承をはかるという「教育」への関心が薄かった、少なくとも持続的に関心もちえなかったといえる。天文学の研究成果を世に問うさいには、批判者との論争もいとわなかった佐田が、舶来品排斥を訴えるうちにその姿勢を失っていったのである。
- なお、佐田の死から一年ほど経過した1884年1月15日、門人たちは私塾・杼海学林を設立している。講師は多田孝泉（『四教儀集註』『古事記』講義）、清水純崎（『春秋左氏伝』『日本政記』講義）であった。規則では、教師1名（任期1年）の招聘、学監2名、寮監1名の在学生による選挙、3年の修学年限などが定められ、第3条には「都て就学者は蝙蝠傘、洋帽、襟巻、廻合羽、指輪、屁漣帶等を用ゆるを禁す」と注記された。そして同3月に置かれた「等外学課」では、「日月行品」「須弥山疑問弁」などが講義課目として挙げられた。もっとも、杼海学林での教育の実態やその後の推移については詳らかではない（以上、『明教新誌』1884年1月16日、18日、3月2日付）。
- 112) たとえば稲田雅洋『自由民権の文化史』（筑摩書房，2000）は、民権運動を新聞と演説によって担われた運動ととらえ、その諸相を論じている。
- 113) 近代的「自治」的教団形成については、羽賀祥二『明治維新と宗教』筑摩書房，1994，第5章などを参照。
- 114) 中野目徹『政教社の研究』思文閣出版，1993，pp.101－102。
- 115) 衣笠安喜前掲論文，p.538。

- 116) 大濱徹也「近代日本のキリスト教」(国学院大学日本文化研究所編『近代化と宗教ブーム』同朋社出版, 1990) p. 144。
- 117) 森銑三「寛政三奇人ノ称呼」(『伝記』第7巻第6号, 1940)。
- 118) 福田行誠「結縁録」(『行誠上人全集』下巻, 東光社, 1906) p. 217。
- 119) 荒川鮎之助「佐田介石和尚能ク聴ケ」(『東京輿論新誌』第88号, 1882年7月22日付)。
- 120) 藤田貞一郎は、佐田の経済論の位置づけについて展望している。すなわち、本庄栄治郎のように佐田を欧化反対の思想と限定するのではなく、山片蟠桃と同様、内需中心型の自生的国民経済構想の系譜上に位置づけ、開放体系に立つ経済構想との路線対立の角度から考察する必要がある、と述べる(藤田『国益思想の系譜と展開』清文堂出版, 1998, p. 353)。こうした経済思想の系譜へ位置づけるという視座も、多角的な佐田研究には有益といえる。だが筆者は、佐田の思想の総体的把握という観点からすれば、中野目徹が鋭く指摘するように、仏教天文学と経済論との「内的連関」をときほぐすことがより重要な課題であろうと考えている(中野目前掲書, p. 101)。

※ なお本稿執筆にあたり、落合弘樹、黒岩康博、鈴木伸治、平良聡弘、塚本明の各氏より、佐田に関する未見史料およびその閲覧に関して、種々ご教示賜った。末筆ながら記して謝意を表したい。